
幸薄ハンターの受難

ばあさあかあ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

幸薄ハンターの受難

【Nコード】

N0487I

【作者名】

ばあさあかあ

【あらすじ】

ドンドルマを拠点とする上位ハンター：グリフィア・クロスロッドに、ある日ギルドマスターからの依頼がやって来る。内容は新人ハンターの育成というもので……

第0狩：プロローグ（前書き）

初投稿です。

ビクビクしながら携帯を握っている、ばあさあかあです。
よろしくお願いします

第0狩：プロローグ

狩るか狩られるか

世界がこの2つの言葉で表せた時代

人外のモンスター達はその牙で、爪で、圧倒的な攻撃力で人間を

モンスターを狩る事を生業とする狩人は畏と、道具と、優れた知力を合わせてモンスターを

狩って、狩られ続けた

これは今より世界が簡単で分かりやすかった時の話

そこは酒と煙草の匂いに溢れていた

扉を開けた途端澄んだ外気をあつという間に飲み込み匂いが訪問者に襲いかかる

始めてここ　ハンターズギルドを訪れる者や、まだ来て日の浅い者はその匂いに顔をしかめる事が多い

しかしギルドで酒盛りをするハンター達やそこで働くギルドの関係者は顔色一つ変えない

慣れとは恐ろしい物だ……とグリフィア・クロスロードは小さく呟いた

グリフィア自身もこの匂いが得意ではなく、初めのうちはギルドを敬遠しがちであった

しかし一度慣れてしまうと、そのグリフィアも匂いの元凶の一つとなっていた

煙草を灰皿に擦り付け、紫煙を吐くとようやく目の前の受付嬢に意識を向ける

さつきから何やら話していたみたいだがグリフィアは意識すらしていなかった

「……って事なのよ、分かってくれた？」

「わりい、聞いてなかった」

受付嬢は溜め息を吐くと黙って一枚の依頼書を差し出してきた

どうせ、モンスターの討伐だろうと新たな煙草をくわえながら、面倒そうに依頼書に目を通す

その内容はグリフィアの予想を超えるものだった

なんと……、まあ、面倒な依頼だというのがグリフィアの感想だった

依頼内容は新人ハンターの育成

つまり弟子をとるといふこと
これは非常にめんどくさい

弟子をとるといふことはそれだけ長い間、自らの行動を制限する事になる

しかも、これまた面倒なのは依頼主たるギルドマスター

ギルドを牛耳る彼からの依頼を断ってはならないのは暗黙のルールとなっている

「ハア……、分かった。ギルドマスターに借りを作つとくのも良いだろう、で？場所は？」

グリフィアは諦めたように溜め息を吐き、くわえたままの煙草に火をつけようとする

「自然の町クルーエルよ」

グリフィアの火をつける前の煙草を奪い取る受付嬢の笑顔に嫌な予感がした

第0狩：プロローグ（後書き）

駄文を読んでくださりありがとうございます。

意見・感想・誤字、脱字等送っていただければ励みになります。

第1狩：ランボス（前書き）

初めての戦闘……上手く書けてるのか不安です（；；）

第1狩：ランボス

偉大なる自然の力を感じずにはいられない……

「見渡す限りの緑、緑、緑……ハア…なんでこんな面倒な事に」

先日、ギルドマスターの依頼で、辺境の町クルーエルで活動する新米ハンターを弟子にとる事になったグリフィア

今はクルーエルへ向かう竜車の中から流れていく景色を眺めているとは言ってももう半刻以上も同じような景色ばかり見たせいか退屈になってくる

「ったく……師、仰ぎたいんなら本人が俺んとこ来いや……しかもよりによってドンドルマから離れた辺鄙なクルーエルかよ」

再び愚痴りだしたグリフィアを気にもとめず、竜車はゆっくりとクルーエルへと向かう

「おい、灰皿あるかい？」

落ち着くためかグリフィアは煙草を取り出し、御者を務める小さな影に声をかけた。

「ニヤ、どうぞニヤ」

小さな影の正体は文字通り“猫”だった。

モンスターに属するのだが人間と友好的な立場にあり、その独自の

技術力を世界に広めた“アイルー族”である。その器用な手先と人間の言語を短期間で覚えてしまう学習能力を買われて、こつやつて人間のつく仕事につくアイルーも少なくないのだ。現にこのアイルーも御者台に腰かけ草食竜に繋がれた綱を、その可愛らしい手で器用に操っていた

「サンキュー、猫ちゃん」

渡された灰皿を手頃な位置に置くと煙草に火をつけて一服。

吐き出された紫煙が風に煽られ、竜車の外へ消えていった

「美味しそうに吸うニヤ、旦那は」

「猫ちゃんも吸うか？」

「僕にはちゃんとアーノルドって名前があるんだニヤよ。仕事からニヤ……遠慮しとくニヤ」

「真面目だねえ……アーノルド君は」

灰皿に灰を落とすと再び煙草はをくわえ、立ち上がった

「どうかしたのかニヤ？」

いきなり立ち上がった乗客を見てアーノルドが不思議そうに声をかける

「ランポスだ、さっきからずっと追って来てやがる」

「ニヤ！？全然気づかなかったニヤ」

「一応ハンターだからな」

グリフィアはそついうと巨銃を肩に担ぎ竜車を飛び出した

「旦那さん！！鎧は！？」

「いらん、ランポス程度ならすぐ終わる先に行ってる」

心配そうに此方を見つめるアーノルドに背を向けたままヒラヒラと手を振ると散歩でもするかのようなにゆっくりと歩き出した

ランポス

青い鱗に身を包み、小振りな鶏冠と牙の並んだ嘴を持つ、竜と鳥の特徴を併せ持つ鳥竜種に属するモンスターだ

体力は少なく、ハンターでなくとも倒すことは不可能ではないが厄介なのはそのずる賢い知能と連携力

殆どが2〜3体で行動しており、その計算された連携で獲物を仕留める

まさにモンスターの中の狩人である

そして、ランポスは獲物を見つけ茂みの影から黄色い目を光らせた

「ひい、ふう、みい……3体か」

グリフィアは愛銃 グラン・ダオラに弾をこめると攻撃に備えた

静寂の中、風が木々を揺らし木の葉がざわめく

刹那

ランポス3体がそれぞれ潜んでいた茂みから時間差でグリフィアに向かい飛びかかる

絶妙なタイミングなためもし1体目の攻撃を避けても2体目、3体目の攻撃をくらうのは明らかだ

さらに運の悪い事に内2体はグリフィアの死角にいたらしくグリフィアからは見えない

風を切り、ランポスの牙が、爪がグリフィアに迫る

「てめえらの連携には惚れ惚れすんぜ」

グリフィアの声と共に巨銃が振り回される

銃声

連続した渴いた音と共に放たれた銃弾は全部で6発

2発ずつがランポスのいる3方に向かう

ほとんど同タイミングで1発が額の鱗を弾きとばし、肉を露にする
そして遅れた2発目が寸分狂わず露になった額にめり込み、ランポ
ス達の頭はその衝撃に耐えきれず、破裂し血飛沫が上がった

「折角、死角奪ったんだ……殺気押さえねえと勘の良い奴にや感づ
かれるぜ」

ランポスの亡骸から爪だけ剥ぎ取るとグリフィアは巨銃を肩に担ぎ、
来た道に戻っていった

第1狩：ランボス（後書き）

読んでくださりありがとうございました。

感想等、御意見送ってくだされば励みになります。

第2狩：クルーエル（前書き）

最後グダグダ感が……書くのって難しいorz

第2狩：クルーエル

グリフィアを気遣って速度を落としてくれていたらしくアーノルドの竜車にはすぐに追いつくことができた

「助かったニヤ、旦那さんが居なかったら僕らきつと食べられてたニヤ」

「なら、運賃まけといてくんな」

礼の言葉を軽く流して、グリフィアは欠伸を1つ

最近、よく寝ていなかったのと温暖期のポカポカした陽気のせいかグリフィアは急激に睡魔に襲われる

「眠りしようかとくわえていた煙草を灰皿で潰して愛銃を抱きしめごろん、と横になる」

堅くて常人なら寝れたものじゃないが、あいにくグリフィアは狩人だ

寝る場所など気にもしない

というかここよりもっと酷い場所で寝たこともある

竜車の中が揺れる度に落ちていく……落ちていく……

さしずめ竜車はゆりかごだろうか

控えめな揺れと僅かに鼻をくすぐる若草の香り

一揺れ毎に意識が薄れやがて定期的な寝息が聞こえてきた

「ハンターといえども人間だニヤ」

アーノルドは眠ってしまった乗客を見て僅かに微笑むと再び手綱を強く握りしめた

美しい湖を前にグリフィアは“彼女”と腰かけていた

「ねえ、ファイア……次の狩りが終わったらさ結婚しようよ」

煌めく紅い髪を風に遊ばせた彼女は静かに言っていた

美しい女だ、大きなエメラルドのような瞳が真っ直ぐグリフィアに向けられていた

「……絶対嫌」

「なっ!?!」

大きな瞳が驚愕にさらに大きく広がる

「アンタねえ、こんな美女がプロポーズしてんのよ!!」俺が一生君を守るよ』くらい言ったらどうなの!?!」

「ギヤー、ギヤー喚くな。俺はてめえの夢物語に付き合う暇はねえの。そんな台詞は白馬の王子様にでも言ってもらいな」

「ヒドイよ……せつかく勇氣振り絞ったのにい」

彼女は膝を抱き抱え、小さく震える

グリフィアだって分かっている彼女の気持ちくらい
そして自分が抱いている彼女への気持ちくらい

グリフィアは無言で彼女を抱きしめ唇を重ねる

「フィア……」

「愛してる……結婚しよう」

彼女の名前の所の部分だけ聞き取れなかった

彼女の名はなんと言ったか？

しかし彼女にはよく聞こえたらしく、嬉しそうに抱きついてきた

そこで目が覚めた

ゆっくり目を開く、相変わらず竜車の中のようにだ

しかし、もう動いてはいない

もう、着いたのだろうか？

グリフィアは身体を動かさし立ち上がると固まった関節を解す

関節を回すたびに聞こえるコリコリという音が心地よい

「あつ、起きたみたいだニヤ」

外からアーノルドの声が聞こえる

荷物を纏めてグランニダオラを肩に担ぎ竜車から飛び降りる

長く寝ていたのか日が眩しい

思わず目を細めると、アーノルドが近づいてきた

「おはようニヤ、旦那さんが寝てる間にクルーエルに着いたニヤよ」

グリフィアはアーノルドの言葉に辺りを見回す

緑が多い、巨大な樹木の群の下に建物が建っている

確かにクルーエルが緑の町と呼ばれるのも頷けるが、しかし

「町つーか村だな」

建物は木製が殆どで住居と大きな建物以外は殆ど何もなかった

「まだ出来て日が浅いものですから……特産品が珍しい物ですから
そこそこ名は知れ渡ってるんですが……」

「あんたは？」

先程から絶えず微笑を続けていた女性が口を開いた

深緑の腰辺りまである長い髪を首もと辺りで1つに結んである
くつきりした眉が特徴な微笑みの似合う大人の女性だ

「クルーエルの村長をさせていただいております。ミアと申します……この度はこんな辺境までいらして頂きまして、本当にありがとうございます」

エメラルドグリーンのロングスカートの端をつまみ上品に会釈するミア

「依頼を受けたグリフィア・クロスロードだ、一応こんな形なりだが上位ハンターだ。まあ、よろしく」

ぶっきらぼうに挨拶を終えるとグリフィアは辺りをもう一度見回す

「地形は把握した。んで？その弟子とやらは？」

「ご案内します、アーノルド着いてきてくれる？」

「はいニヤ」

話の流れからするとアーノルドはミアのアイルーらしい

御者アイルーを雇う余裕も無いのかここは……

ミアがアーノルドと歩き出したのを見るとため息を一つ吐いてグリフィアも後に続いた

「本当にごめんなさいね、グリフィアさん。ドンドルマから来ていただいて」

歩いている途中ミアが話しかけて来た

「全くだ、普通教えを請う奴が来るのが常識だろう」

グリフィアの言葉にミアが申し訳なさそうに微笑んだ

「ごめんなさい、この村にはその新人の子を含んで2人しかハンターが居ないのよ。1人でも抜けられちゃうと困っちゃって……」

「よく持ったな、ハンター2人……つか1人は新人ながら。実質ハンター1人で。まあ、そんな事情があつたなら仕方ないか」

後で追加報酬請求しようとしたグリフィアの野望は潰えた

「それで……良かったらグリフィアさんにも新人ハンターの子を教える間この町の依頼を受けて欲しいのよ」

追加報酬の夢復活

「もちろんタダでは言わないわ。追加報酬も少ないけど出しますから」

「構わねえぞ、報酬さえもらえたらな」

新たな依頼内容が増えた時アーノルドが口を開いた

「見えましたニヤ」

グリフィアがその声につられると小さな丘の下に横に広い住居がただずんでいた

第2狩：クルーエル（後書き）

感想等いただけたら作者が欢喜します

第3狩：ライア（前書き）

日常は苦手です。グダグダ感が拭いきれませんが……
戦闘もですが……

第3狩：ライア

ミアはその建物にグリフィアを招き入れると広間のような部屋に案内するとソファアへと座らせた

「今、狩りに行ってるらしいので……しばらく待っててくださいね」

「ああ、ハンターが少ないと大変だな」

向かいのソファアにミアが座り、アーノルドが紅茶と御茶請けを持ってきた

「んで？その新人ハンターってのはどんなやつなんだ？」

御茶請けのクッキーをつまみながら、グリフィアは問う

「そうですね……元気な子ですね、ただ……」

「元気がゆえ無茶をする……新人ハンターでよくあるパターンだよ」

本人に合わないと詳しい事は分からないが代々のイメージをグリフィアの中で組んでいく

先ずはその元氣すぎるのを何とかしなければならぬ

「ここからは仕事の話だミア。期間を決めておく、こつゆつのはダラダラしててもきりがないからな」

「まあ、仕方ないですね」

「期間はそうだな、今が温暖期だからな……次の温暖期の終わりまでだ。それまでにとりあえずその無茶を直してやる」

「分かりました」

「んで、報酬は期間が終わる時相談しよう」

「はい、分かりました。ギルドマスターにもそう伝えときます」

ミアの答えにグリフィアは満足そうに微笑み紅茶を煽った

クッキーの欠片がこびりついていた口内が温かい紅茶で洗い流されていく

「ニヤニヤ、ミア様。ライア様がお帰りになりましたニヤ」

その時、扉が開いてアーノルドと1人のハンターが姿を現した

「ただいま帰ったツス」

ランポスの皮や鱗で出来た鎧を要所を鉄鉱石で補強したランポスメイルとグリーヴだけ身に纏った少女だ

てっきり新人ハンターというのが男性とばかり思っていたグリフィアは少し拍子抜けした

「ん？ミアさん……まさかその人がライアの御師匠様ツスカ？」

「そうよ」

ミアの言葉を聞いているのかさえ分からない尋常じゃないスピードでライアはグリフィアに駆け寄り手をつかんだ

「へ？」

そのまま猛烈な勢いでブンブンと手を上下に振られる

「自分、ライア・シユバルツっていうツス。今日からよろしくお願ひするツス。じゃあ先ずはライアの家案内するツス」

「おっ、おい!?!」

そのままグリフィアを引つ張ってライアは姿を消した

残されたミアとアーノルドは

「いつもながら忙しい子ねえ」

「ニヤ、グリフィアの旦那さんも大変だニヤ」

のんびり紅茶をすすっていた

有無を言わずライアの家に連れてこられたグリフィアは大層ご機嫌ナナメでした

「そんなに怒らないで欲しいツスよ御師匠様」

「……別に怒ってねえよ」

座ったソファで足を組み、頬杖をついてライアの方を見ようともせずにグリフィアはボソツと呟いた

グリフィアが機嫌の悪い原因はライアである、彼女の無茶苦茶なひっぱりかたでグリフィアのシャツの袖が破れたのだ

それでも愛銃を離さなかったグリフィアは称賛に値する

「まあ、後で修理代は請求するとして」

「そりゃないツスよ」

足元にすぎりつくライアは華麗にスルーだ

「改めて自己紹介だ。俺は依頼を受けて来たヘヴィボウガン使いのグリフィア・クロスロード、上位ハンターだ。約1年でお前を1人前に育ててやる」

上位ハンターという言葉にライアの目が輝いた

「上位ハンターツスか？御師匠様スゴいツス！！じゃあライアももう一回、ライア・シュバルツツ、ツス。ハンター歴は2週間、ハンマー使いツス」

ハンマーか……とグリフィアは小さく呟く

ハンターの武器の中で最も重く、最も高い破壊力を持つ打撃武器だ

振り回すだけで脅威的な威力をもたらすが、その振り回すのが難しい並の筋力では持ち上げる事すら難しい、扱いづらい武器だ

「お前、ハンマーなんて使いこなせるのか？」

単純な疑問だ

ライアはどう見ても、年頃の少女だ

どう見てもハンマーを操れそうには見えない

しかしそれがライアは馬鹿にされたととったよう

「当たり前ツス。そこまで言うなら明日一緒に狩りに行くツス、そしてライアの戦いに惚れちゃうがいいツス」

ふん、と顔を反らすライアにグリフィアは苦笑を浮かべる

「わあった、わあった。俺も昔はハンマーを使ってた事がある、教えられることはあるだろう」

「本当ツスか？」

ライアはその言葉に機嫌が治ったように無邪気に笑う

グリフィアはそれにつられて微笑んだ

「じゃあ、今日から此処に住むツス」

.....

「えっと御師匠様の部屋はライアの部屋の隣の空き部屋でお願いするツス」

「.....は？」

「2階は嫌ツスか？ならキッチン横に小さな部屋が.....」

「いや、そうじゃなくって俺は男だぞ」

「知ってるツスよ？」

何を今更といった表情でライアは首を傾げる

「いや、今日会ったばかりの男女が1つ屋根の下で普通暮らさねえよ」

「でも、師弟なんすからプライベートでも仲良くしたいツス.....御師匠様はライアの事嫌いツスか？」

「いや、別にそうじゃないけど」

「なら良いじゃないツスか」

こうして強制的にライアとの同棲生活が始まった

第3狩：ライア（後書き）

いきなりなんです。グリフィアとライアの仲間ハンターを募集します。

名前、容姿、年齢、性別、装備、備考等書いて送ってください。

期間は10日1日までとさせていただきます。

皆さんのアイディアお待ちしています。

第4狩：頑固パン（前書き）

急に真面目だな、おい

なんか構成も納得いかないよorz

第4狩：頑固パン

「ふわぁーっと……そーいやライアン所に世話になる事になったんだっけ？」

目覚めたグリフィアが見たのは覚えのない部屋

思考するうちに昨日、無理矢理にライアの所で生活する事になったのを思い出す

固まった関節を伸ばしながら窓に近づき、カーテンを開ける

部屋に朝日が差し込み、眩い光に一瞬目が眩む

「うんざりするくねえ、良い天気だな畜生め」

そのままテーブルに向かい、その上にグランⅡダオラ置くと分解を始める

瞬く間に机の上がボウガンのパーツで埋まった

遠距離武器であるボウガンはとても精密な計算にて作られている、その上このグランⅡダオラは未だ未発達のリボルバー機能を搭載している

その為こうやってボウガンに不具合がないか豆に調整が必要なのだ

「リボルバーの動きがぎこちないな……油を差しておくか……」

リボルバーに油を差し、再びグランⅡダオラを組み上げる

続いて日課である弾の調合でもしようかと立ち上がった時、勢いよく扉が開いた

「朝ツスよー！！御師匠様起きてくださいツス〜！！」

手にしたフライパンとおたまで耳障りな金属音を響かせるライア

耳を押さえるグリフィアを見てライアの動きが止まった

みるみるうちに瞳に涙がたまっけて行く

「酷いツスー！！御師匠様何で起きてるんスカー！！計画してた『ライアが毎朝起こしたげるね、お兄ちゃん』作戦はどうなるんスカー！！」

「不協和音奏でといて開口一番がそれか……。ガンナーの朝は早いんだ……。仕方ないだろう」

「せつかく早起きしたツスのに……。あつ、ご飯出来てるツスよ」

表情が一変し眩しい位の笑顔になるライア
泣いたり笑ったり忙しい奴だとグリフィアはほくそ笑んだ

「いただきますか」

「こっちツス」

「……固いな」

「硬いツスね」

朝食は頑固パンそしてグリフィアの前にだけくず肉の炒め物ののつた皿があつた

どうせダイエットとかいう下らない理由だろう、食事はハンターの生命線だというのに……とグリフィアは心中思いながら頑固パンにかじりつく

食卓にて向かい合わせの男女が必死にパンにかじりついている姿はシニール極まりない光景であろう

「いつもこれか？」

「そうツスよ ライアの家は貧乏ツスから、報酬は仕送りに消えるツス ……申し訳ないツス御師匠様……男の人は足りないツスよね？」

瞬時、理解した

ライアは食事を疎かにしているのでは無いのだ
家族のためにしざるを得なかったのだ

家族の為にハンターになったのなら街に出るのが普通だが、何か理由がありまだ発展途上のクルーエルにてハンター業を営んでいるのであろう

グリフィアはダイエットの為と勘違いした自分を腹立たしく思い、
恥じた

「食え……」

くず肉の炒め物

くずと名がついている低級食材とはいえ、肉は肉
同じ低級食材の中では一番値が張る

これもグリフィアの為を思い、ライア自身にかける食費を削り作っ
たのだろう差し出された皿に驚いた表情をしたライアだが直ぐに笑
顔を見せる

「駄目ツスよ これは御師匠様が食べる分ツス……それに……ライ
アはダイエツト中なんスからあ。ハツ、まさかライアを太らせて食
べようと、御師匠様えっちツス」

嘘

感づいた今なら分かる

ライアは優しすぎるのだ

まだ知り合って間もないグリフィアいや初対面の相手にさえこの優
しさを与えるだろう

この元気な笑顔でさえも相手を安心させるためだけの仮面

それを気づいてしまった

気づいてしまったからこそグリフィアは心からライアの力になりた
いと思った

「そっか……」

ライアは既に頑固パンを食べ終えようとしている

それを見たグリフィアはくず肉炒めと頑固パンを一気に口に入れた
「行くぞ、ライア」

「えっ？ちよつ御師匠様！？」

ライアの手を掴むとグリフィアは外へと連れ出した

思ったより小さな手はグリフィアの豆だらけの手に包み込まれた

この娘を放つては置けない、グリフィアが生まれてから初めて他人を守りたいと思った瞬間だった

第4狩：頑固パン（後書き）

キャラ切実募集中

一応期限は9月一杯なんですけど……応募来るのかな？

第5狩：ランポス複数（前書き）

戦闘描写に自信がないばあさあかあです。

今回は長めに書けました

第5狩：ランポス複数

ライアをつれてやって来たのはクルーエルの酒場、クエストを受ける事ができ、これからはここを中心とした生活になっていくだろう

今回はクエストが目的ではなく食事が目的

ライアは自分を犠牲にして家族を助けている、先ほどの食生活で分かったがよほど切り詰めた生活をしているに違いない

「腹に貯まるものを頼む」

ウエイトレスに声をかけるとカウンターにライアを座らせ、その隣に自分も腰かける

ライアはどうしたら良いのか分からないようだが大人しく座っている

「アプトノスのステーキセットです」

直ぐにウエイトレスが笑顔と共に料理を運んできた

肉汁が滴る厚切りのステーキにココットライス、砲丸レタス等のサラダと朝からスゴイ量だが腹には貯まるだろう別にグリフィアは料理が出来ない訳ではない為、料理を作っても良かったが生憎食材を扱う店はまだ閉まっていたし、家にある食材の量は少ないだろう

「食べよ、後なこれから食費は俺が出す。文句は言わせない……分かったな」

「えっ？でも流石にそれは……」

「師匠止めてやるのか？」

「分かったッス……」

脅迫は卑怯で嫌いだがもう最終手段だ

このままだとどちらにも引かずに日が暮れそうだからだ

「なら、食べ」

ライアは渋々ながらステーキにナイフを走らせた

肉の抵抗はほとんどなく、切断面から肉汁が溢れんばかりに流れ出た

恐る恐るカットしたステーキをフォークに差し、口元近くへ持つてくる

そしてまたグリフィアを見つめた

グリフィアは無言で頷いて、ライアにステーキを食べるように進める

ライアはまだ躊躇していたが意を決した様にステーキを頬張った
噛むごとに口内を肉汁と肉片が踊り、肉の芳醇な香りが食欲を促進させる

久しぶりに食べ物らしい物を食べ身体が、更に肉を欲している

「……旨いッスよお……御師匠様」

後はもう無言だった

溢れてきた涙は肉の美味しさからか師匠の優しさからか
ライアは涙を溢しているのも気づかないで食べ続けた

(やっぱり無理してたんじゃねえかよ……)

スゴイ勢いでしかし綺麗にステーキセットを食べるライアを見てグリフィアは自然と微笑む

グリフィアは席を立つと、依頼書が張つてあるクエストボードへ向かうライアは気づいていないようだ

「……ランポスの間引きのクエストが出てるな……とりあえずこれだな」

適当な依頼書を取ると、依頼を管理している受付嬢の前に立ちそれを差し出す

「あ〜ら？貴方が噂の凄腕ハンターかしらあ？村長から話は聞いてるわよあ。私はコメント コメントさんって呼んでねえ」

訂正

受付オカマだ

ギルドの制服に身を包んでいるのだが、その鍛えぬかれた肉体により制服はパツンパツンに伸びて身体の線を強調している

彫りの深い顔つきなのだが化粧を施したそれは気色悪さや気味悪さよりも何故か親しみやすさを感じた

「依頼を受けたい」

グリフィアは動じずに依頼書をコメントに渡す

コメントはそれを一瞥すると頷いた

「分かったわ、いつ発つ予定かしら？」

「弟子の食事が終わり次第向かおう」

「はあい、なら手続きをとっておくわ。確認だけとおその御弟子さんはライアちゃんよねえ？」

「ああ」

「気を配ってあげてねえ、あの子は無理を溜め込むタイプだからあ

「承知した」

コメントに一礼するとライアの元へと戻る
どうやら食事は終わったようでお冷やを飲んでいる

「あつ、御師匠様へ 御馳走でしたッス」

気のせいかな顔色も良くなったようで、笑顔にも張りがある
本当に無理をしていたようだ

「……早速だが今からランポスの討伐へ向かうぞ」

「了解ッス」

ラジャーと敬礼までしたライアに苦笑を浮かべ、グリフィアは準備に取りかかるうとしていた

用意を終えた2人は村の近くの森へ来ていた、ここにランポス複数頭が現れ、近くに放牧されていた家畜が被害を受けたらしい

幸い家畜の被害だけですんだが、早めに駆除しなければ負傷者も出てくるだろう

この依頼はそう感じた村長からの依頼だった

「ランポスの数は8体らしい、今回はお前の实力を見るためも含まれているし、何より村のためだ心してかかれよ」

「はいッス！！お師匠様もライアの戦い心してみるッス」

そう意気込むライアの装備は胴と脚にランポスシリーズを纏っており頭と腕と腰は何も装備していなかった

武器は鉄鉱石が主に使われているウォーメイス

特にこれといった特徴もないが、軽めに作られており初心者にも扱いやすいのが長所のハンマーだ

「まあ、期待しておこうか……」

そういうグリフィアの装備はカーボーイハットが特徴的なレザーイトSシリーズ

上位素材を使用しているもののその防御力は下位クラスに近く、防御力よりも動きやすさを徹底した防具だ

そして武器はもちろんグランダオラ、幾つもの狩り場を共に駆け抜けてきた相棒だ

「じゃあ、行くか」

テントは立てずに支給品だけとってベースキャンプを後にする

簡易テントは寝て回復したりと便利なのだが、立てるのになにぶん手間がかかる

今回は依頼内容も簡単なので簡易テントは立てないのだ

「居ないツスねえ」

木々をかき分けながらライアがぼやく
グリフィアは黙って後に続いた

ライアが前衛を務め、その後ろをガンナーであるグリフィアがというセオリー通りフォーメーションだが敵の接近にはいち早く気づける

しかしだ、標的であるランポスが1頭も見つからない

「…………嫌な予感がする」

「あつ、いたツスよ。御師匠様」

長年のハンター業で培ったグリフィアの直感が何かを感じ取ったがライアの言葉にそれを無理矢理振り払った

「8頭か…………こんだけの数がいて、それを束ねるドスランポスが居ないのか…………少し妙だな」

言いながらも、降り立たんで腰につけていたグランニダオラを展開。ライアも己の得物ウォーメイスを構える

「サポートは任せろ…………行け」

「分かったツス！」

ハンマーを腰元に構え、力を溜めながらライアはランポスに肉薄する
ランポスもライアの存在に気づいたようで鳴き声を上げる

「痛いツスよお」

貯めた力を開放し、ハンマーを頭上に振り上げランポスの胸めがけ
叩きつける

しかしランポスはバックステップにてそれを避ける

「まだまだツス！…きゃっ」

追撃を加えようとしたライアに左右からランポスが飛びかかる、前
転で避けられたのは偶然に過ぎず、普通ならその発達した爪で身体を
切り裂かれていた筈だ

「危なかったツス」

そう言いながらもハンマーを連続して叩きつけ、ランポスを倒すラ
イア

そのまま2頭目にかかるうとするがいつの間にか周りを取り囲んで
いた残りのランポスの攻撃にそれを中断し攻撃を身体を反らしたり、
ハンマーで威力を和らげたりと防御に回る

「……………囲まれたか、さあ……………どう出る？」

それをスコープ越しに見ていたグリフィアは小さく呟く

「ライアの秘策行くツスよ!!」

力をためたライアは走りながら力を開放する、ハンマーを構えたままライアは回転しだした

自身の力とハンマーの遠心力でどんどん回転の勢いの増すライア

俗に回転攻撃と言われる一撃離脱がコンセプトなハンマーには珍しく、威力よりも手数を重視した攻撃だ

しかし普通はその勢いに耐えきれず、10回転しないうちに止まってしまうのだがライアは止まるどころか更に勢いが増す

よほど軸がしつかりしているのだろう

台風と化したライアはランポスを次々巻き込む

巻き込まれたランポスはある者は背骨を砕かれ、ある者は頭を潰され、ある者は身体を穿たれた

「目がく回ったツス」

ついに止まったかと思うとフラフラと目を回すライア

しかしまだ戦いは回っていないのだ

最初に倒した1頭、回転攻撃で倒した4頭。計5頭、しかしランポスはまだ3頭残っている

「ギヤアギヤア」

ランポスは隙だらけのライアに近づき、牙爪でライアを倒そうと辺りを取り囲むように走る

いつもなら絶体絶命だ、いつもなら

「そろそろ介入するか……」

ライアがランポスと交戦しているところから数十メートル
グリフィアはポツリと漏らし、引き金をひく

すぐに1頭のランポスの顎を吹き飛ばした
しかし倒すまでには至らない

だが隙を作り、残りのランポスを此方に気づかせるには充分だった
ようだ

残りのランポスはグリフィアに気づくとライアを放ってグリフィア
に向かってきた

顎が吹き飛んだランポスもフラフラと此方に駆けてくる

「馬鹿が……」

リボルバーを回転させ、空になった薬莢をまだ撃たれていない薬莢
と共に排出

流れるような早さで、3発変わった形の弾を装填した

ギアアギアア

ランポスが隊列を組ながら近づいてくる

グリフィアは充分にランポスを引き付けると引き金を引いた

まず先頭のランポスに向かって放たれた弾丸はランポスの目の前で

破裂し、中に込められていた無数の弾丸がランポスの顔を完全に吹き飛ばす

首から上を失っても尚勢いの止まらないランポスの身体を避けると、そのまま連続して引き金を引く

少し距離が空いていた2頭のランポスに先ほどと同じように破裂し、中に込められていた無数の弾丸が襲いかかる

銃弾の雨に身体を撃ち抜かれ、ランポスは音を立てて倒れた

「弱肉強食……これも自然の摂理だ」

空になった藁莖を弾き出すと、グリフィアはグランニダオラを背負い直した

ランポス達を倒した銃弾は散弾、近距離では集中した範囲を高威力で、中距離では広範囲に弾丸に込められた無数の小さな弾丸が襲いかかる使い勝手の良い弾丸だ

「御師匠様ー!!」

体勢を立て直したライアが駆け寄ってくる

「御師匠様、ライアの戦い何点ツスか？」

グリフィアはランポスから剥ぎ取りを行いながら答える

「20点だな……お前はもっと周りを見た戦いをしろ」

「うう……厳しい評価ツス……」

「だが、素質はある。俺が絶対お前を凄腕ハンターにしてみせるから」

「御師匠様 大好きツスう」

落ち込んでいたライアがグリフィアの言葉に顔を輝かせ飛びついてくる

「さっ、帰るぞ」

「ぎゃふん」

それを軽く避け、標的を失ったライアは地面にぶつかってしまった

「ひどいツスよお、御師匠様あ」

「抱きついてくるお前が悪い」

ライアを助け起こし、グリフィア達はそのまま帰路へついた

第5狩：ランポス複数（後書き）

皆様キャラクター投稿して頂きありがとうございます

期間中に投稿して頂いたキャラクターは必ず出させて頂きますので

まだまだキャラクター募集中です

第6狩：異変（前書き）

私情により更新が大幅に遅れてしまいました

今回は後書きに採用キャラを記載させていただいています

第6狩：異変

「……やはり、何かおかしい」

グリフィアは誰に言うでもなく呟いた

まだ数回しか来たことがないクルーエル近くの森だが、何か違和感を覚えていた

「どうしたツス？御師匠様？」

師匠のただならぬ雰囲気を感じたのかライアが心配して、顔を覗きこんでくる

「いや、来たぞ！！」

遠くに見える青と赤の点、それはキョロキョロ辺りを警戒しながら此方へ駆けてきた

通常体よりも大きな体躯と、血のように赤い巨大な鶏冠と発達した爪を併せ持つランポス達を束ねるリーダー
ドスランポスだ

そして今回の標的でもある

「動きをよく見る、だが常に周りも警戒しろ」

「分かったツス……」

リボルバーに銃弾を込めるグリフィアの言葉をライアは大きく頷き
ドスランポスと対峙した

「ナイスサポートだったツスよ 御師匠様」

ドスランポスを見事狩り終えた2人は村に戻ったその足で酒場へと
来ていた

「……………」

「御師匠様？」

ビールの入ったジョッキを片手に嬉々して師匠の活躍を語るライア
だがグリフィアはボーツとカクテルの入ったグラスを動かかし、その
中の氷結晶がカラコロと音をたてる様を見つめていた

「御師匠様ー！！おいツスー！！ライアが呼んでるツスよおー！！」
ライアは目の前で手をブンブンと振ってみせるがそれでもグリフィ
アの目はグラスの中の氷結晶に注がれたままだ

「ううー、御師匠様……………」

ライアが落ち込む中、グリフィアの後ろから迫る巨影が……
後ろの人物はライアに目配せするとグリフィアの首筋にフツと息を
かけた

「……!!」

声にならない叫び声を上げて、危うくグラスを落としそうになるグリフィア

「可愛いお弟子さんが呼んでるんだから、気づいたげなさいよう」

息を吹きかけた犯人であるコメットはクネクネと身体をくねらせ、口を開いた

「……ん？呼んでいたのか、ライア？」

「ずっと呼んでいたツスよお……」

「それは、気づかなかった」

悪びれた様子もなく、グリフィアは息を吹きかけられた不快感を拭おうと首元を擦り始める

「で？何を悩んでるのぉ？」

「あつ、ライアも聞きたいツス」

身を乗りだし、今か今かとグリフィアの答えを期待する2人にグリフィアは大きなため息をついた

「……森だ」

「は？」

「村近くの森はおかしい。今までは感じる程度だったが今日確信に変わった」

「何故、そう思ったツスか？」

「最初は妙な違和感を感じる程度だった、だが今日のドスランポス何かおかしくなかったか？」

グリフィアに言われ、今日倒したドスランポスを思い出すライア

「そういえば……ライア、前にも一度だけドスランポスと戦った事があるツス。けど、今回のドスランポスはあんまし強くなかった気がしたツス。御師匠様のサポートのおかげだと思ってたんすけど？」

「そうだ、あのドスランポスは明らかに疲労していた、それにドスランポスの叫び声を聞いても1頭もランポスが駆けつけなかった」

「確かにい、ランポスは連携力の強いモンスターだから、群れのリーダーの危機にい、助けにいかないはずが無いわねえ」

「そういえば！！最初の狩り以来ランポスを見てない気がするツス！！！」

ライアの言葉に多少は周りを気にするようになったかと1人小さく笑うグリフィア

周りを見ていなかった最初に比べたら大きな進歩だ

そのままグリフィアは次の言葉を紡ぐ

「ランポスが消え、変わりに頻繁に見かける様になったモンスター」

「がいるな？恐らくこの異変の正体はそのモンスターの群れとランプポスの縄張り争いからなる物だ」

「そして……ドスランプスをあれほどまでに疲労させた正体は……」
グリフィアが言葉を区切ったその時だった、扉が開きミアが姿を見せたのは

「グリフィアさん！！ライアちゃん！！大変です！！森にババコンガが！！」

ミアの言葉を聞いてグリフィアはほくそ笑む

「……桃毛獣ババコンガだ」

同刻

「此方から彼の気配を感じますわ」

1人のハンターが期限良さそうにクルーエルに向かっていた

第6狩：異変（後書き）

投稿キャラの採用は

名無しさんのユキノ・ウエハラを採用させて頂きました
名無しさんありがとうございました

他にも投稿して頂いたキャラは必ず出させて出させていただけます
ので楽しみに

第7狩：ユキノ・ウエハラ（前書き）

遅くなりました。

ようやくの更新です。これもマクロスのせいだあ

つと、今話いよいよ投稿キャラの登場です

第7狩：ユキノ・ウエハラ

グリフィアとライアはミアからババコンガの狩猟の依頼を受けると、ババコンガの狩猟の為の用意を済ませてからまた酒場へと戻っていた。

しかし森へと向かう竜車がまだ到着してはず、2人は竜車の到着を待っていた。

「……お前にとって、始めての大型モンスターだ。今までのモンスターとはレベルが違う、それを頭に入れておけ」

「分かったツス」

「ババコンガの攻撃は大振りで隙が大きいため、攻撃のチャンスは増える……だがな深追いはするな。攻撃が大振りという事はそれだけ一撃の威力が高いという事だ……一撃で昇天って事もありうる」

ゴクリ

ライアが唾を飲み込んだ音がグリフィアにも聞こえた。

「まあ、そんなに緊張するな。さっきも言ったように攻撃は大振りだから避けやすいし、攻撃後の隙も大きい。一撃離脱を心がけておけば大丈夫だ」

「そうツスカ」

ライアから安堵の息が漏れる、よほど緊張していたらしい。

「陣形はセオリー通りに俺が後ろでお前が前、俺がお前を援護してお前がババコングに大きな一撃を叩き込む……いや」

ただ大型モンスターと始めて対峙するライア1人に前衛を任すのはまだ少々不安だ。

グリフィアも可能な限り前に出てババコングの気を引いてライアの負担を減らさなければならぬ。

グリフィアのレーザーライトSシリーズは上位防具とはいえどもその防御力は下位防具に近い。

ババコングの攻撃を和らげてはくれないだろう。

防具の強度を考えると、怒り状態の一撃が耐えられるかどうかだ。

だがライアはもっと危うい、やはりグリフィアが前衛に出て大きな隙を見せたときだけライアに攻撃してもらおう。

これがライアの安全を第1に考えたグリフィアなりの策だ。

「少し失礼しますわ」

ライアに作戦の変更を伝えようとした時、後から声をかけられた

グリフィアが振り向くとそこには1人のハンターがいた。

年齢はライアと変わらないのではないだろうか、発育途中の身体を今回の標的である主にババコングの素材からなるコングシリーズで包んでいた。

「お前は？」

「私はユキノ・ウエハラと申しますわ。各地を渡りながらハンター業をさせていただいておりますの」

グリフィアの問いに礼儀正しくお辞儀をして名乗るユキノ。

「んで、お前さんは俺達に何か用事が？」

「はい、貴方達が“彼”に会いに行くとか小耳に挟んだものですから私も同行させて頂けないかと思っただのですわ」

“彼”？グリフィアとライアは顔を見合わせ首をかしげる、今から誰かを訪ねる予定は無い筈だ。

そう2人が自問するとグリフィアは“彼”の正体に気づいたようであるほど小さく呟いているがライアは分からないようでユキノにおずおずと質問をぶつけた。

「えつと……ユキノさん？」

「ユキノで良いですわ」

「じゃあ、ユキノ。ライア達これから狩りには行くツスけど誰にも会わないツスよ？人違いじゃないツスか？」

ライアの言葉に答えたのはユキノではなく、グリフィアだった。

「ライア、ユキノが“彼”と呼んでいるのはババコンガの事だ。お前も聞いたことがあるだろう？ハンターの中には一部のモンスターに愛情を持ち、そのモンスターを別格扱いする輩がいると。合っているか？ユキノ」

「正解ですわ。あの可愛らしい毛並、おどけた茶目っ気のある顔つき……あのたくましく太い腕に抱かれて眠れたらどんなに幸せでしょう」

うっとり妄想世界にトリップしつつあるユキノを現実世界に戻すためグリフィアは次の言葉をかける。

「つまりは狩りに同行したいという事だな？」

「そうですね、私は何十頭も彼を倒してきました。きっと役に立ちますわよ」

ユキノの言葉に改めてユキノを観察する。

身に纏うコンガシリーズはババコンガを数頭狩るだけでは造れるものではないし、背中に背負ったウォーボンゴもババコンガの素材から出来る狩猟笛、ユキノの言っている言葉は事実であろう。

ババコンガの狩猟の経験があるユキノなら安心して前衛を任せられるし、そうすればグリフィアも初めて大型モンスターを狩るライアのサポートに徹することが出来る。

それにいるんなハンターと狩りに出る事もライアには良い経験になるだろう。

答えは明白だった。

「ならユキノ、俺らと共に来てくれ。俺はグリフィアこっちは弟子の」

「ライア・シュバルツツ、ツスよ よろしく頼むツス」

「では改めまして、ユキノ・ウエハラですわ、皆様よろしくお願ひします」

自己紹介を済ませると時を見計らったように現れた竜車に乗り込み、
3人は森へと向かった。

第7狩：ユキノ・ウエハラ（後書き）

見事なお嬢様口調w

名無しさん、イメージと違いましたら申し訳ありません

次話は久しぶりの借りとなります。

狩猟笛の描写に不安ありますorz

第8狩：グリフィア・クロスロード（前書き）

そつえばグリフィアの容姿の描写が書いてなかったなあと感じて急いで書きました

第8狩：グリフィア・クロスロード

ライアは人生これ程までに緊張した経験は無かった。

三人がいるのは拠点となるベースキャンプしかし安全圏であるここにいるにも関わらずに、妙な不快感を感じ更には、漂っただならぬ殺気の余波に思わず身を縮こまらせる。

「ふん、向こうはこの森の支配者になったつもりらしいな、胸糞悪い」

師匠の言葉で理解した、これが大型モンスターが放つプレッシャーなのだ。

大型モンスターを初めて狩るライアにとっては、緊張を増幅させるには充分だった。

「大丈夫ですか？」

「えっ？あつ、ああ。大丈夫ツスよ ちよつと緊張してるだけツス」

ライアを心配してユキノが声をかけてきてくれた。

気づくと2人は格ケの準備に取りかかっていた。

以前の狩りでは見ることに無かったテントも今回は長丁場になると判断したのか、それを確りと張り終えたグリフィアはグランダオラの調整を行っていた。

ユキノ自身も腕に支給品を抱えている。

「これ、貴方の分ですわ」

そう言ってその半分をライアに押しつけてきた、ライアはその予想

以上の量と重さに驚きながらもそれを受け取った。

「これ……なんか多くないツスカ？」

ライアが渡された量は明らかに1人に支給される支給品の量よりも多い。

よく見るとユキノが抱えている恐らくユキノの分であるう支給品も僅かながらに多いようだ。

「これはグリフィア様がくださったのですわ」

「御師匠様が？」

コクリと頷き、まるでババコンガを語る時の様に瞳がトロンとし始めるユキノ。

「支給品はまだ不馴れだろう私達にと御自身の分を分けてくださりました。あの時のグリフィア様の気品はババコンガのようでしたわ」

……うん、それは本人の前では言わないほうがいいツスね。と心の中で思うライア

ババコンガは見たことはないがその子分であるコンガならライアも何度か見たことがあるし狩った事もある。

ピンクの毛並みは可愛らしかったが、はっきり言って例えられたくない見た目である。

実際ライアなら、例えられたならば相手に溜めをぶち当ててやる。

ライアは1人ウツトリと桃色世界へとトリップするユキノに苦笑しながら、支給品の礼を言うべく師匠の元へと向かった。

が、ライアの足はそこで止まった。
目の前の光景が余りにも美しかったから……。

茶色の艶やかで絹糸のような長髪はベースキャンプに差し込む日の光を反射し、まるで宝石細工のようにキラキラと輝く。

まるで凜とした美少女のような美しいと言っても過言ではない顔つき。

つり目の紅眼から射す眼光は今は目の前のグラン＝ダオラだけに向けられていた。

マジマジと師匠の顔を見るのはこれが初めて、しかし師匠はこれ程までに美しかったのかとライアは思わず息を飲んだ。

「……？どうした、ライア。準備は出来たのか？」

どのくらい見つめていたのだろう、作業の終えたグリフィアは立ちすくむライアに気づいたのか小首をかしげる。

「あ、いや、あのありがとうツス。ライアの為に支給品譲ってくれて」

ライアは言うが早いか自らの師に向かって深々と頭を下げる。

感謝の印もあるが何より紅潮した自分を見せたくなかったからだ。

「……そんなに感謝されると、逆に困る。準備ができたなら行くぞ」

「は、はいツス」

頭を下げたままのライアの脇を通り、他のメンバーの準備を待つユ

キノの方へ向かうグリフィアはライアは慌てて追いかけた。

第8狩：グリフィア・クロスロード（後書き）

まあ、グリフィアは線の細い美形とってもらえればOKです

今回はキャラ紹介を挟みます

第9狩：コンガ（前書き）

予定ではキャラ紹介の筈でしたが、キャラ紹介はババコンガ戦の後にさせていただきます。

第9狩：コンガ

「……2人ともよく聞け、陣形だがライアは隙を見て一撃離脱を心得る。ユキノは好きに動いて構わないがライアを気にしておいてくれ。俺はお前らに合わせてサポートに徹する」

森を駆け抜けながらのグリフィアの言葉、走りながら言っている筈なのだがいつもの淡々とした口調には一片の揺らぎもなく、後ろを走る2人にも難なく聞き取ることができた。

「分かったッス」

「分かりましたわ」

二人の返事を聞くとライアは森の開けた場所で止まる。

そこでは桃色の獣が蠢いていた。

“蠢いていた”という描写はおかしくは無かった、目の前の広場はコンガで埋め尽くされていたのだ。

「これ全部コンガッスか？」

「流石の私でも初めて見ましたわ」

驚くライアに、どこか嬉しそうなユキノ。

「……どうやらコンガ共の食事会に乱入しちゃったらしいな」

苦笑を浮かべながら、グリフィアはさもめんどくさそうに愛銃を展

開し、銃身を肩にのせる。
ライアとユキノもそれぞれ己の武器を抜き放とうとするが、グリフィアは片手でそれを制した。

「ババコンガとの戦いのために、体力は残しておけ。ここは俺がやる」

そういつて此方を威嚇しているコンガの群れの中に無防備に歩いていくグリフィア。

「……数えるのすらめんどくさいな」

小さな呟き。

それが戦闘開始の合図。

無茶苦茶に顔を振り回しながら、グリフィアに突進するコンガの群れ。

全方位からやってくる獣の波、その全てにグリフィアは、一瞬で散弾を叩き込んだ。

グリフィアのグランニダオラは特注品だ、対応する弾丸を全て6発まで装填できる。

これは散弾を使った戦いを活かすための己なりのアレンジ。

発泡された6発の散弾からコンガに向けばら蒔かれた、無数の弾丸。密集したのが仇となり、避けるすべなく凶弾に体を蝕まれ、次々と倒れていくコンガ。

まだグリフィアの猛攻は止まらない、散弾を撃ちきるとリボルバーを回転させ、空になった薬莢を弾き出し次弾を装填する。

装填したのは通常弾Lv.1、威力は低いが非常に軽量かつ、低反動で癖がない使いやすい弾だ。

グリフィアは近くにいた散弾の雨から運良く生き残っているコンガの額に銃口を突きつけ発砲。

発射された弾は2発、貫通までとはいかなかったが1発が肉を抉り頭骨の前で止まり、2発目がそれを叩いて頭骨を砕き、コンガは絶命した。

「あと1匹」

いうが早いか生き残ったコンガがその重量でグリフィアを押し潰そうと、四脚で地面を弾き高く跳躍する。

コンガが自分を押し潰す前にグリフィアは手を伸ばし、コンガの頭を鷲掴みそのまま勢いを乗せて地面に叩きつけた。

頭を強打し、のたうち回るコンガにグリフィアは残弾全てを放った。

「フウーツ……下位コンガ程度に本気を出しすぎたか？」

頭に計4つの銃痕から血を流し絶命したコンガにグリフィアは腰かけてポーチではなくポケットから煙草を取り出し火をつける。

久しぶりの闘いの感覚に身体にアドレナリンが充満しているのが分かる。

グリフィアは闘いの興奮を抑えるために、ゆっくりと肺に煙を送った。

「御師匠様、スゴイッス！！コンガって投げれるんスね」

「流石は上位ハンターですね、圧倒的な實力を見せていただきました」

興奮気味のライアとただただグリフィアを賞賛するユキノ。紫煙を吐き出すとグリフィアは頷いた。

「経験の差だ、色んな経験を積み2人供。それは全て明日を生きるための力となるからな」

言い切るとまだ吸いきっていない煙草を地面に捨て、踏み消すグリフィア。

そして後ろに向けて声をかけた。

「んで？てめえの感想はどうだよ？今後のため是非に聞かせてもらいたいんだが？」

それと同時に何か落ちてきた。

形態はコンガに酷似している、桃色の体毛に丸太のように太い腕、湾曲した爪。

ただ違うのはコンガと2周り以上大きなその巨体、そしてリーダーの威厳でもある頭から生える角の様に固められた極彩色の毛。

グリフィアの声が聞こえたのかは分からないが、桃毛獣ババコンガが姿を現した。

第9狩：コンガ（後書き）

今回はグリフィアの独壇場です。

まだ完全に本気を出した訳ではありませんが、実力の片鱗が見えた……かな？

しかし最強モノではないのです……まあ、一応グリフィアは上位ハンターでありクエストは下位のものですからね。

第10狩：ババコンガ前編（前書き）

長くなりそうなので2分割します。

ライア……ごめんよ

第10狩：ババコンガ前編

「何呆けてる！！来るぞ」

グリフィアの声にハツとなるライア、隣を見るとユキノは既に己の得物を抜いている。

「じゃあ作戦どつりにいきますわよ」

「分かってるッス」

グリフィアと入れ違いでユキノと一緒に前衛に立つライア。既に得物であるウォーハンマーは抜いてある。

ブルウアアアアア！！

豚のような鳴き声を上げながら立ち上がり両手を広げて身体を揺さぶるババコンガ。

これはババコンガが外敵を見つけた時の行動、敵を排除するために己を鼓舞する為の行動だ。

「やあっ！！」

掛け声と共にユキノはウォードラムを薙ぐ、狩猟笛はハンマーと同じ打撃武器であるがハンマーよりは軽量だ、そのためハンマーのように叩きつける以外にも薙ぐ等の素早く器用な攻撃も可能なのだ、ババコンガの横から、薙がれた狩猟笛はババコンガの腕を打ちつけ

る。
軽いとはいえ、その速度と遠心力を纏った一撃はハンマーにも劣らない。

ババコンガは僅かに仰け反り、ユキノへと狙い定める。

立ち上がり、強靱な腕を振り回しながらユキノへと迫っていく、がしかし流石はババコンガに陶醉しているだけのことはある。

ババコンガが立ち上がった時点でユキノは武器をしまっており、既に安全圏へと離脱していた。

目標を見失ったババコンガはバランスを崩したのか、最大の力で振り回している腕に身体を持つていかれたのか半回転し背中を地面に打ちつけ仰向け状態になった。

そのまま荒い息を整えはじめた。

その隙を見逃すはずがなく無防備な頭に力を貯めたライアが肉薄、鉄槌をババコンガの脳天に向け振り下ろした。

悲鳴を上げながらも体勢を立て直したババコンガがライアに攻撃を加えようとするがそれはグリフィアがババコンガとライアの間にはなつた銃弾で止められる。

「ふむ……いい感じだな」

まだ大したダメージは与えていないが、グリフィア達が完全に主導権を握った。

このペースを保てば負けることはない、グリフィアはそう思いながら次弾を装填した。

しかしグリフィアはライアの動きが少しずつ大胆になっているのに

は気づくことができなかった。

それが大きく戦況を変化させる事になるとは思いもしなかったのだ。

身体が軽い。

ライアがババコンガとの対峙で感じた事。

グリフィアとユキノが、ライアが動きやすいようにとサポートしてくれているのだ。

初めての大型モンスターという事で気を張り詰めすぎていたようだ。此方にはババコンガのエキスパートであるユキノと、圧倒的な実力のグリフィアがいるのだ。

よくよく考えたら負ける要因が無い。

それにババコンガの攻撃は手数が多いグリフィアや積極的に攻撃するユキノに偏っていた。

攻撃後の隙をついて、度々ライアも強力な一撃をババコンガに叩きつけた。

ババコンガの悲痛な叫び声から、ライアはもう少しで狩れるのだ、と興奮し始めていた。

心強い仲間がいる安心感と言う名の油断がライアの行動を大胆にさせていたのだった。

ババコンガがライアに向け背を向ける。
ユキノは武器をしまい、距離をあけたがライアはその無防備な背中に攻撃を加えようとハンマーを構える。

いつものライアならば同じ前衛のユキノが下がった時点で何かに感づいた筈であろう。

しかし興奮し、油断している今のライアは回復アイテムを使用する為にユキノが一時離れた位にしか思わなかったのだ。

「馬鹿！！離れる！！」

「えっ？キャツ、キャアアアアアア」

グリフィアの声に我に変えるが、遅すぎた。

ババコンガの尻から気弾が放たれ、振り下ろされたウォーハンマーごとライアを弾き飛ばしたのだ。

本当にババコンガが気弾を放つわけでは無い、ババコンガからしてみれば只の放屁行動に過ぎないのだ。

しかし圧縮されたそれは人間を軽く吹き飛ばす様な威力がある。

ババコンガの代表的な攻撃だ。

ライアだってそれについては知っていた。

地面に何度か叩きつけられ、ようやく勢いが止まる。

「カハツ　　ゴハツ…息が…息…オエーッ」

諸に吸い込み、身体にこびりついた激臭、身体は息をするのを拒み、吸い込んだ悪臭の元を吐き出そうと何度か咳き込む。そして臭いに耐えきれなくなったライアは嘔吐してしまう。

胃の中の物を吐き尽くしても、吐き気は収まることを知らずにライアは呼吸すら疎かにして吐き続ける。

その無防備な姿を見たババコンガがライアに襲いかからんと走り出す。

「ちっ！！ユキノ、ライアを頼む！！」

「分かりましたわ」

ユキノはライアに向けて走り出す、グリフィアは自分に注意が行くようにグラン・ダオラを構え、通常弾を連射する。

寸分狂わずに連射された6発の銃弾はババコンガの角のような毛に直撃し、それを吹き飛ばした。

グウオオオオ

群れを統べる権威の象徴を壊されたババコンガは両手を広げて身体を揺すり始める。

狩りを始める為の鼓舞ではなく、敵を破壊尽くすための怒りの具現。

顔を深紅に染め上げたババコンガは標的をライアからグリフィアに変更すると雄叫びを上げた。

第10狩：ババコンガ前編（後書き）

次回の更新は今週中にできたら良いなと思ってます

さてととりあえずはババコンガを倒してきますかね

第11狩：パソコンガ後編（前書き）

やっと漢検終わった……

今回はグダグダになってるかもしれませんが（汗）

第11狩：ババコンガ後編

「ちっ！！ユキノ、ライアを頼む！！」

「分かりましたわ」

グリフィアの言葉を聞く前にユキノは駆け出ししていた。後ろの発砲音は恐らくグリフィアがババコンガが此方に意識を向けぬように注意を引いてくれているのだろう。

今は急がなくてはならない、毎年ババコンガの放屁行動をくらい窒息死で命を落とす新人ハンターが出ている事を知っていたからだ。

ライアの元へたどり着いたユキノは思わず息を飲んだ。

ライアは既に気を失っており、満足に呼吸すら出来ない状態だった。

直ぐにユキノはポーチから幾つか小さな球を取り出すとライアの周りに叩きつけた。

砕けた球の中から水色の煙が吹き出しライアを包み込む。

消臭作用のある落陽草と素材玉を調合した消臭玉だ。

落陽草だけではできない、広範囲の消臭を可能としており一般的な消臭アイテムと知られている物だった。

素材玉から噴出した煙を浴びたライアは僅かだが穏やかな表情へと変わる、しかし放屁により減った体力まで消臭玉は回復してはくれない。

かといって回復薬すら飲めぬ程、ライアは衰弱している。回復薬を塗り込もうにも、ダメージは外傷ではないのだ。

だが回復させてやらないとライアが危ない。

普通のハンターならば諦めていた所だ

「私、諦める事は嫌いなんです」

普通のハンターならば……。

「貴女を死なせわせませんわ」

ユキノは生憎と普通のハンターではないのだ。背負っていた武器を構え、ユキノは小さく呟いた。

ゴウッ

空気を引き裂きながら迫るババコンガの腕をグリフィアはバツクして避ける。

標的を見失ってもババコンガの腕の勢いは止まらずに、周りの木々を破壊し宙に舞わせた。

宙へと舞った木々は、重力に従ってグリフィアに襲いかからんとはかりに落下してくる。

ガアアアアア

ババコンガも追撃をかけるべく、四脚を使い突進してくる。

グリフィアは焦る事なく、木々が迫る真上に向け銃口を向けて連続して発砲。

撃ち出された散弾は、いとも簡単に木々を粉碎した。

木屑が振りかかるのも気にせず、直ぐにババコンガに銃口を向けて発砲………するのを思い止まった。

グリフィアの実力からすれば、ババコンガを倒す事など造作も無い事だ。

しかしそれでいいのか？

この依頼はライアを成長させるために受けたものでは無かったか？

その自問が、グリフィアの判断を鈍らせた。

「っ！！しまった」

既に目の前まで迫っているババコンガ、グリフィアが気づいた時には既に回避は無理であった。

「ぐうっ！！」

少しでも衝撃を押さえようと、ババコンガの突進力をのせたタックルが当たる直前にババコンガの身体を蹴る。

しかし、威力が押さえられたとは言っても相手は人外の怪力をもったモンスター。グリフィアの行動は気休め程度にしかならず、簡単にグリフィアを吹き飛ばした。

「っ………油断したか………」

とはいえ、よろめきながらとはいえ直ぐに立ち上がったのはその気休めのお陰だ。

しかしグリフィアは未だババコンガを攻撃できずにいた。

頭の中でぐるぐる回りながら衝突する思考と思考。

此処でババコンガを倒せば依頼は成功する。

しかし、ライアの経験にはならない。

だからといって、攻撃をくらったこの身体でライア達が来るまで持ちこたえるか？

だがライアが戦闘出来るまでに回復するのはだいぶ時間がかかりそうだ。

その時、感じた気配にグリフィアは笑みを浮かべババコンガに銃口を向けた。

「……愚問だったな。俺とした事がくだらん事に時間を裂いた……俺はただ」

グリフィアの後ろの茂みから2人の狩人が飛び出した。

「御師匠様」

「お待たせしましたわ」

「黙って引き金を引き続ければいいんだ」

飛び出したライアとユキノは己の得物を構え、グリフィアに微笑み

を向けた。

どうやってユキノがあそこまで衰弱していたライアを回復させたのは分からないが、2人の登場によりグリフィアの煩惱が拭えたのは事実。

ババコンガは雄叫びを上げて威嚇をするが3人は表情すらかえない。

「ユキノ、思いっきりやってくれて構わん、もうライアのサポートは不要だ」

「分かりましたわ 私の全力見せてあげましょう」

微笑みながら頷いて、狩猟笛を構えるユキノ。

そしてグリフィアはライアに向きなおる。

「ライア、お前の思うように動け」

告げる言葉は短い物。

しかし師の意図は弟子にしっかりと伝わる。

「つまりは、好きにしろって事ッスよね」

ライアの問いに沈黙を持って答えるグリフィア。

そして再び戦いが始まった。

「いきますわよ」

I hope your activity

狩猟笛を奏で演奏の上に旋律を絡ませるユキノ。
ウォーボンゴの奏でる陽気な鼓動にユキノの優しげな声が重なり、
変化が起こった。

「…………痛みが消えた？…………なるほどこれがユキノの演奏か…………」

先程、ババコンガの攻撃をくらったグリフィア。
その痛みは収まり、そればかりか体力まで戻っているのを感じた。

狩猟笛

それは単なる鈍器では無い。

狩猟笛の真価は演奏によるその演奏を聞いた者への身体強化だ。

狩猟笛は吹く、或は叩き、また或は弾いて、人間の身体に作用する
演奏。

ウォーボンゴは叩いて演奏をする狩猟笛。

さらにユキノは吹く必要のない狩猟笛を活かし、演奏に重ねて唄を
絡ませる事で演奏の効果を高めているのだ。

恐らくは、ユキノがライアを回復させた方法はこれだろう。

I encourage . You trample on
monster

ウォーボンゴの向きにより、絶えず変わっていく音色。

陽気の感じの音色は勇ましい物へと変わり、唄も力強い物へと変化
する。

先程とは違う演奏を聞くと、グリフィアは次に身体の奥から燃え盛
る紅蓮の炎が沸き上がるのを感じる。

炎はそのまま力へと変換されていく。

「グラン!!ダオラが軽い……力の増幅効果か」

ユキノが回復効果のある演奏に次いで演奏したのは力の増幅効果のある演奏。

前衛の剣士はより強力な一撃を放てるように、後衛のガンナーは得物の重さの負担を軽くし機動力をあげることができる。

「さあ、お二人さん。蹂躪しなさい!!」

ユキノの声で力を溜めながらライアが駆ける。

得物の重さからくる負担が軽くなるのは剣士も同じで、ライアの速さは先程の比にならない。

ガアアアアア

ババコンガは咆哮しながらライアを裂こうと爪を振り降ろし

その爪が爆ぜた。

爪が吹き飛んだ衝撃でバランスが崩れて頭を垂れるババコンガ。

「悪いが、ライアには手を出させん」

銃煙を吹き上げるグラン!!ダオラを構え、ニヤリと笑うグリフィア。彼は続けて銃弾の雨を降らせる。

近くで力を溜めるライアには擦りもせず、ババコンガの身体に突き刺さる銃弾。

致命傷を与えられるわけではないが、ババコンガをその場に縫いつけるのには充分。

グウオオオオ

うめき声を上げながら、仁王立ちするババコンガ。大きく膨れ硬質化した腹は銃弾を跳ね返す。

「このままじゃ……頭が狙えないツス」

全ての生物の共通した弱点である脳に直接衝撃を与えられる事から、打撃武器は頭を狙うのがセオリーとなっている。

しかしババコンガは仁王立ちの最中、頭的位置が高く狙えない。

「狙えないのなら、狙えるようにすればいいんですのよ!!」

獅子哮を上げながらユキノが肉薄して、ババコンガの背中に笛を叩きつけた。

何かが砕けた嫌な音が響き、ババコンガが崩れ落ち、のたうちまわる。

「さあ、トドメですわよ。ライア」

「臭い思いはもうお断りツス!!!」

演奏で強化されたライアの一撃はババコンガの頭蓋を陥没させ、二度とババコンガが起き上がる事は無かった。

「ふう……やつと終わっ……たッス……きゃっ!？」

渾身の一撃で相当体力を消耗したのか、それとも初の大型モンスターを倒した事で緊張の糸が切れたのか、その場に倒れそうになるライアをグリフィアは抱き抱える。

「御師匠様……これは…恥ずかしいッスよ〜」

顔を沸騰せんばかりに真っ赤に染め上げ、慌てふためくライア。

「どうせ、立つ気力も残っていないのだろう？まあ、よくやった方だし……竜車まで俺が運んでやる」

「で、でも。ライアまだ完全に放屁の臭いが落ちてなくてえ」

「構わんさ、お前の匂いなら苦にもならん」

そういつて少し微笑んでやると、ライアはボソボソ呟きながらますます顔を真っ赤にしてグリフィアから目を反らし大人しくグリフィアの首に腕を回した。

しばらくして聞こえてきた寢息にグリフィアは優しげに微笑みながら弟子の頭をそつと撫でてやる。

「あらあら、随分と見せつけちゃってくれますのね」

ババコンガから3人分の剥ぎ取りを済ませてきたユキノがグリフィアとライアを見て不機嫌そうにそう呟く。

「随分とユキノには世話になったな……ありがとう、助かった」

グリフィアの微笑みにライアのように真っ赤になり、目を反らすユキノ。

「何か礼をしたいな……希望はあるか？」

「……でしたら……もしよろしければ私を貴殿方のパーティーに入れてくれませんか？……あくまで……よかったですけど……」

「それでいいのか？」

目をそらしながら、ユキノがいった言葉にグリフィアは驚いた表情を浮かべるが、やがて穏やかな表情を浮かべ頷いた。

「これからよろしく頼む。ユキノ」

新たな仲間が増え、今回の狩りは幕を閉じたのだった。

同刻、フラヒヤ山脈頂上付近にて

ガアアアアアアア

長い断末魔を上げて青とオレンジのストライプの体色をもつ原始的な風貌を残す竜“轟竜ティガレックス”が命を散らした。

「……………グウウ……………」

その亡骸を、唸り声を上げながら見つめる黒い巨人。

その周りは雪山だというのに、巨人が倒したであろう雪山に生息する様々な大型モンスターの血肉により真っ赤になっていた。

「グガアアアアアアアア！」

手に持った巨剣を掲げ、天地が崩れるような咆哮を上げる巨人。

剣を背負うと地鳴りをたてながら巨人はクルーエルに向かっていったがこれはまた次の話。

第11狩：ババコンガ後編（後書き）

とりあえずこれで一章は完結です。

第2章でのグリフィア、ライアそして新たなメンバーとなったユキノの活躍に期待してください……とハードルを上げてみる。

キャラファイル(前書き)

その名の通りキャラクターのプロファイルです。
まだ少ないですが随時更新します。

キャラファイル

名前：グリファイア・クロスロード

年齢：28

身長：181

容姿：絹糸のような茶色の長髪。つり目の紅眼のせいで近寄りやすい威圧が常時放たれている。やせ形で筋肉は必要最低限に落としてある。

性格：冷静で面倒くさがりだが、周りをたいせつにする

装備：グラン・ダオラ、レーザーライトS（第1章終了時点）

備考：HR6。ドンドルマを拠点としていたがギルドマスターからの依頼によりクルーエルにと拠点を移す。ボウガンの扱いに非常に長けており中でもリボルバー搭載型の極めて銃に近いボウガンを好む。その射撃の腕はG級ハンターさえ上まわる事もあり、ガンナーの間では有名。昔、ハンマーを使用していた事もあるらしいが詳しい事は不明。

名前：ライア・シュバルツ

年齢：17

身長：147

容姿：黄色がかったオレンジのロングボブ。成長期に食事を切り詰めたせいでかなり小柄だが、何故だか発育は年齢以上に良い。

性格：明るく、優しいのだが自分より周りを優先する癖がある

装備：ランポスメイル、ランポスグリーヴ。ウォーハンマー

備考：HR1。ハンマーを使う新人ハンター。グリファイアが来るまでは村の依頼を報酬を受け取らずに成功すると2倍になる契約金だけを受け取り暮らしていた。優しすぎるのが悪いところで周りを助けるならば自分を犠牲にしてしまう。小柄からは想像できないほどの

強力な一撃を放てる。「ッス」が口癖。

名前：ユキノ・ウエハラ

年齢：26

身長：162

性格：仲間思いで優しいのだが独特の美的センスから仲間は少ない
容姿：金髪のカチューシャ編み。童顔で小柄ということから十代に見られてしまう。またライアよりない自分の胸を気にしている。

装備：コンガシリーズ、ウォーボンゴ（第1章終了時点）

備考：HR2。ババコンガ狩りの後からグリフィア達と行動を共にするようになる。何かとハンター達から敬遠されがちなババコンガを溺愛しており、ババコンガの狩猟のプロ。ただ問題なのはババコンガを美しいと認識しており、気に入った異性をババコンガに例える事から彼氏が出来たことはないらしい。お嬢様口調だがいいところの出身かは不明。名無しさんに提供していただいたキャラクターで、作者曰く魅力的かつ動かしやすい。

名前：ミア

年齢：31

身長：168

容姿：軽く深い緑のかかった長髪を首もとでまとめている。くつきりした眉と屈託のない笑顔から彼女に惹かれる人は多い。

性格：のんびりした性格だがしっかりしている。

備考：クルーエルの村長。長寿で経験豊富な竜人が村長になるのが一般的だが人間であるにも関わらず彼女は村を起こし、最年少の村長となった。彼女の人柄から村人の尊敬は厚い。

名前：アーノルド

容姿：毛並みはやや青みがかった灰色。

性格：しっかり物

備考：ミアに雇われているアイルー、御者からキッチンアイルーまでなんでもこなす言わば出来る子

キャラファイル(後書き)

章が終わる事に更新します

第2章 第12狩：ラクス・ブレイン（前書き）

第2章スタートです。

相変わらずの駄文ですが……

第2章 第12狩：ラクス・ブレイン

何故だ？

黒き巨人は巨剣を獲物の腹へと突き刺す。鱗や甲殻にさえ覆われていないが不思議な感触の外皮は異物を体内に侵入させまいと、それを弾こうとする。

何故だ？

「ガアアアアアアアアアア！！！」

吼える。

それだけで身体の奥底に眠る存在ものが爆ぜて、己の力となった。巨剣の切れ味はお世辞にも良いとはいえないだが、切れ味など己の力でカバーすればいいのだ。

いつから自分は狂い始めた？

力で無理矢理、巨剣を腹へと突き刺してゆく。外皮が拒もうと、其れを上回る力で押し返し。獲物が暴れれば片腕で首を締め上げる。

……い……っ……カラ？

ブシュッ……

遂に皮を貫き、巨剣が獲物の中にまで侵入した。

兜ごしに伝わる温かい狂気の色。

ソウダ……サガシテイルンダツタナ

巨剣の柄を握りしめ、突き刺さった獲物ごと持ち上げる。

「ガアアアアアアアア！」

黒き巨人の何倍もの巨体を持ち上げるのだから、身体のおちこちが軋みを上げる。

だが黒き巨人は気にしない。

そのまま獲物を貫き、狂気の色に濡れた剣先を地面へと突き刺し、獲物を縫いつける。

ドコニイル？

のたうち苦しむ、獲物の身体に手先を沈めてゆく。

皮を破り、肉を千切りながら身体に侵入していく感触が籠手ごしに伝わってくる。

ココニイルノカ？

コウオオエオオオ

人間の悲鳴のような咆哮をあげることでは知られている獲物。苦しみの中放たれた其は、ただ己の欲望を促進するのみ。

チガウ……ココカ！！

獲物の体内を侵入させた腕でめっちゃめっちゃに蹂躞する。

痛み of せい か 獲物の抵抗がより一層激しくなっていくのが分かる。
次の瞬間、獲物の身体が青く輝り、獲物を中心に電流が発せられた。

「ガアアアアアアア……」

悲鳴を上げ、首がガツクリと下がる黒き巨人。

鎧からは黒煙が上がり、流された電流の強さを物語っている。

……イナイ

コウオオエオオオ

外敵が行動を停止したのを見た獲物 フルフル は、今度は此方が狩る方に周ったのだと悟り、伸縮自在な首を黒き巨人へと伸ばす。とりあえずはこの傷の治療が優先だ。

この傷の元凶である忌々しい敵を捕食し、少しでも傷の治りを早くしなければ……

そう考え、フルフルは黒き巨人を呑み込もうと口を開けた。

イナイ!!

兜ごしの瞳が光ったかと思うと、黒き巨人はフルフルの開いた口を掴み、一気に裂いた。

コウオオエオオオ!!

悲鳴を上げるフルフルに見向きもせず、フルフルに跨がると手当たり次第にフルフルの肉を抉ってゆく。

イナイ!!イナイ!!イナイ!!ドコ!?ドコダ!?

鮮血が吹き出し、自らに吹きかかるのも構わず肉を抉り、臓器を穿ち、骨を潰す。

その惨劇はフルフルが息絶えても続けられ、遂にフルフルがいた場所には肉片と血溜まりだけになった。

「アアア……アア」

悲しげともとれるうめき声を上げて、黒き巨人は血溜まりから立ち上がる。

そして血溜まりの中に刺さっていた巨剣を抜くとその場を後にした。

「ライア、そつちいったぞ!!」

グリフィアはリロードしながら檄を飛ばす。

頭を振り回し毒液を撒き散らしながら、ライアに向かって突撃していく巨大なモンスター。

尻尾だけがピンクだが全体的に紺色のずんぐりとした身体つき、捻れた嘴に、頭の上のハンマー状の鶏冠。

毒怪鳥ゲリヨスだ。

巨大な翼を持つ飛竜の特徴を持つせいか、飛竜種と同一視されがちだがゲリヨスはランポス達と同じ鳥類種に属すモンスターだ。

今回はクルーエル付近の森に現れたゲリヨスの狩猟に来ているのだ

った。

「分かってるッスよ〜」

ライアは力を溜めながら、走るゲリヨスに肉薄。すれ違い様に一撃を叩き込んだ。

「うう……… やっぱ効いてるのか効いてないのか分かんない感触ッス」

ゲリヨスは身体を鱗や甲殻の代わりにゴム質の皮で覆っている。

ゴム質の皮は斬撃にこそ鱗や甲殻に劣るが打撃や弾丸の衝撃を和らげる効果があり、打撃武器や遠距離武器を扱う狩人にとっては苦戦を強いられるモンスターなのだ。

「いくら打撃が効きにくいとはいえ、ダメージが無い訳ではありませんわよ」

ゲリヨスがライアを捕捉しようとして身体の向きを変えた所にユキノが鶏冠に向かってウォーボンゴを叩きつける。

すると長時間の戦いの中、鶏冠に蓄積していたダメージとユキノの一撃で鶏冠は碎け散った。

ギヤアアア

鶏冠を根本から碎かれたゲリヨスは大きく仰け反り、たたらを踏んだ。

「よくやった、ユキノ」

グリフィアはユキノに声をかけながら連続して引き金を引く。

ゲリヨスは鶏冠に発光器官を備えており、鶏冠を嘴に叩きつける事で閃光を放ち。

外敵の目を眩ませるのだ。

視界が途絶えると当たり前だが戦闘に支障がでる。

すでに3人も何度か閃光をくらい、そのままゲリヨスの追撃をくらいそうになるという危ない場面もあったのだ。

だが鶏冠を壊された以上ゲリヨスは閃光を放つ事は出来ない。

これで1つ障害が無くなった。

カツカツカツ！！

しかしゲリヨスは毒息を漏らしながら小刻みにジャンプはじめ、目の縁が赤く染まった。

いわゆる怒り状態である。

「怒ったって事はダメージが聞いてるって事だ。一気にたたみかけろぞ」

「了解しましたわ」

「分かったツス」

それからゲリヨスが地に伏せるのにはさほど時間がかからなかった。

「依頼は達成した、証拠品のゴム質の皮だ」

「あんら、お疲れ様ねえ。はい、じゃあ此方が報酬金よ」

クルーエルに帰ってきたグリフィアはコメントに狩猟したゲリヨスから剥ぎ取った皮を見せると報酬を受け取る。

「今度は個人的な依頼でもしちゃうかしらあ？私の心を採取してほしいんだけどお」

「それは、狩猟の部類に入るな」

コメントの熱い視線を一言の元に切り伏せ、グリフィアはライア達が待つ席へと向かった。

既に2人は料理に手をつけており（グリフィアが促したのだが）グリフィアが近づくと顔を上げた。

「ん、今回の報酬だ」

報酬金はギルドの方が既に3等分してくれているため、グリフィアは2つをそれぞれに渡す。

「金欠のライアには有難いッス」

既にババコンガの狩猟から1週間、ようやくライアとの師弟関係が上手く運ぶようになり、ユキノとの連携も様になってきた。

ついでにライアは装備を新調していた。

以前のランポスメイルとグリーブはそのままに残りの頭、腕、腰はマカライト鉱石をふんだんにつかったハイメタシリーズの防具を作成していた。

武器はウォーハンマーを強化し、鎚部分を球状にしてハリの実と鉄鉱石を交ぜ作り上げた鉄針が力を溜めると飛び出るギミックのついたハンマー、スパイクハンマーになっていた。

ユキノは変わらずコンガシリーズとウォーボンゴ。

ウォーボンゴは上位武器だが、ユキノに聞けば両親から譲り受けた物だと言う。

グリフィアも相変わらずレザーライトSシリーズとグランIIダオラを愛用し続けていた。

「そういえば……この村にはもう1人ハンターがいると聞きましたけど?」

上品にナイフで肉を口に運びながらユキノがライアに向け口を開く。

そういえば、ミアがそんな事を言っていたなとグリフィアは思い、黙ってはいたがライアに意識を向けた。

「うあ?ラクスさんの事ツスか?ラクスさんは今村を離れてるツスけどそろそろ戻るんじゃないツスカね?」

のんびりとした口調で口を開くライア。

「…………ラクス・ブレインか」

「あれ？何で御師匠様、ラクスさんのファミリーネーム知ってるッスか？」

「やっぱりか、と呟くグリフィア。」

「引退したと聞いていたが……まさかこんな辺境の村に腰をおちつけているとはな……」

「ラクス・ブレイン……確か約15年前に名を馳せていたハンターですわね」

「当時は今世紀最強の狩人とも謳われていたな」

昔を語る2人に全くついていけないライア。黙々と料理に手をつけながら、2人の話を聞いていた。

そんなライアに巨影がかかった。

「いつの間にもやら、随分と賑やかになっていますね」

巨影の主　ラクス・ブレイン　は苦笑を浮かべた。

第2章 第12狩：ラクス・ブレイン（後書き）

さあ、新キャラの登場。

さあ、3人はどう絡んで行くのでしょうか？

第13狩：黒き巨人（前書き）

自分にしちゃ早い投稿です

今回最後の方だけです。が投稿していただいたキャラがです。少しですがね

第13狩：黒き巨人

でかい男だ。

比喻ではなく本当にでかい男なのだ。

目測でしかないが身長は約2m半ばをゆうに超える。

ただ後ろに撫でつけるようにセットした漆黒の髪は荒々しさを感じさせる。

服装は村人とさほど変わりない木綿のシャツとジーンズなのだが、服ごしからでも分かる、極限まで鍛え上げられた筋肉の鎧が存在を誇張していた。

見た人物に恐怖感や威圧感を与える体つきなのだが、口許が浮かべる慈愛に満ちた笑みがそれを打ち消し、紳士的な印象を感じさせた。

「初めまして、御二方、ラクス・ブレインと申します。」

体軀に似合わず、流暢にお辞儀をするラクス。

「ユ、ユキノ・ウエハラですわ、ラクスさん…お会いできて光栄です。」

「そんなにお気を張らなくて大丈夫ですよ、美しいお嬢さん。気軽にラクスとお呼びください」

「う、美しいだなんて」

名を知っているハンターが目の前にいるという事で若干緊張しているユキノだったがラクスの言葉に僅かに頬を染まらせた。

「おかえりッス、ラクスさん」

「ライア：貴女も私をラクスと呼んでくれて構わないのですよ？」

「いいんすよ。ラクスさんはライアが御師匠様の次に尊敬してる人ッスから」

和やかな雰囲気では話する2人。話が終わるとラクスはグリフィアに向き直った。

「そして……貴方のお噂は聞いています。“グリフィア・クロスロード”さん。ライアの弟子を引き受けてくださってるんですね？すみません……本来は私がライアの師になるべきなのですが……生憎私は他の村のハンターも掛け持ちして……ご迷惑かけます。」

「……………構わん」

素っ気なく返事を返すグリフィアだが意識はしっかりとラクスに向けられていた。

「そうですね。あつ、すみません。ミアさんを待たせてるんですけどりあえずは挨拶だけで失礼しますね。」

一礼して去っていくラクスを見送りながらユキノが呟いた。

「素敵な方でしたわね……やはり桃毛獣にひけをとらない身体を持っているからでしょうね」

「…それ本人の前で言っちゃ駄目ツスよ」

「何故ですか？私がこの様に寝た男性はババコンガが前のババコンガの様に顔を真紅に染め、身体を振るわせて喜んでいましたか？」

「世間一般ではそれを怒っていると言っツス」

「意味が分かりませんか？何故怒るのですか？ババコンガに例えられて嬉しくないはずないじゃありませんか！！」

「確かに、下品の象徴に例えられて嬉しくないはずないツスね……どうしたツス？御師匠様？」

ユキノのツツコミにも疲れたのか、皮肉じみた言葉を告げたライアだが黙ってラクスが去っていった方を見続ける師に気づいて声をかけた。

「いや……少し席を外す」

グリフィアは席を立つと酒場を後にしてしまった。

「何かあつたんスかね？」

「さあ？あの人の考えはイマイチ読めませんわ」

2人は不思議そうにグリフィアの背中を見送るのだった。

イナイ……

黒き巨人は巨剣を引きずりながら幽鬼の様に森をさまよっていた。

自分は何を求めているのか？

自分は何者なのか？

そんな単純な思考すら巨人は失いつつあった。

あるのは破壊衝動と　　を見つけたしたいという思いだけ。

ギヤアギヤア

そんな巨人の前にランポスの群れが姿を現した。

その数約30。さらには群れのリーダーたるドスランポスまでいる。

普通のハンターでも逃げ出したくなるような数だ。

しかし狂気の中の巨人はまるで喜ぶかのように吼えた。

イタ……イタアアアアアア！

巨剣をその場に突き刺し、群れに向かって駆ける黒き巨人。

手近なランポスの頭を掴み、そのまま潰す。

頭からの信号を失い、力なく倒れるランポス。

コイツハ…チガウ。

頭が無いランポスの骸を踏みつけ、破散させる。

その様子にドスランポスの危機感知能力が目の前の巨人は危険だとドスランポスに告げる。

クウアオ ……

群れに撤退を伝えようと吠えようとしたドスランポスだがそれが実際に行われる事はなかった。

ナラ…コイツカ？

ドスランポスの嘴と背中をを力強く掴み、ドスランポスを凝視しながら、だんだんと引っ張るように力を込めていく。

悲鳴を上げようにも、嘴を押さえられているため鳴くことができない。

ドスランポスができるのは身体のおちこちが軋みを上げ、血が噴き出す音を聞くことと、自分の身体が引き裂かれていくのを見ることだけだった。

コイツモ…チガウノカ

両手に持った、半分に引き裂かれたドスランポス。

それを無造作に捨てて、硬直するランポス達に向き直った。

まあ、いい。

これだけいるんだ、もしかしたら がいるかも知れない。

ハハハハ…ははハハ…いまサがしダしてヤルカラナ…：“ヘレナ”

そうして一方的な殺戮が始まった。

クルーエルの酒場にて。

ライアとユキノがそろそろおいとましようかと考えていた時、来客者がいた。

「ちゃーす ハンターさんいますかねえ？」

「……うるさいな、お前」

ライアとユキノが目を向けると青い和風の鎧に身を包むハンターと赤い攻撃的なデザインの鎧を纏ったハンターがいた。

「おっ？あんたらハンターさん？」

2人の視線に気づいた青い和風の鎧のハンターが笑いかけた。

第13狩：黒き巨人（後書き）

出てきた投稿キャラは分かったでしょうか？

出ると言っても、描写だけ名前はまた次回です。

第14狩：太陽と月 陰と陽 朝と夜（前書き）

目標の連続更新ができたああ（^^） / \（^^）

タイトルは投稿キャラを示しています……多分

第14狩：太陽と月 陰と陽 朝と夜

「あんたらがこの村のハンターさん？」

青い和風の鎧 クックDシリーズのハンターは2人に近づくともう一度声をかけた。

「そっツスよ？」

代表してライアが答えると、彼は機嫌よさそうに2人の向かいに腰かけた。

「俺は移動遊戯団サーカスの団長、ギン・シルバスターだ。よろしく」

「「よ、よろしく」」

今までに、会ったことないくらい明るいギンにペースを持っていかれつつある2人。

「ハアツ……こいつはこんな奴なんだ。諦めてくれ」

先程から黙っていた赤い攻撃的なデザインの鎧 レウスシリーズのハンターが頭に手をやりながら口を開いた。

「んなことはいいからさ、お前も自己紹介しろよ」

「今からするとこだ、……僕は神月ラセだ。」

「よろしくツス」

「貴方もよろしければお座りになつたらいかがです？」

2人に頭を軽く下げた後、黙つたままギンの隣に腰かけた。

「つと息苦しいからヘルムはとらせてもらうぜ」

ギンがヘルムをとるとラセもそれにならつた。

完全に露になつた素顔、2人供、息を飲む程の美少年だつた。

ギンの日の光に煌めく銀髪の対のような闇夜をそのまま写したかのようなラセの黒髪。

陽と陰、太陽と月、朝と夜等の対でこそあるが決して交わらず、お互いに無くてはならない存在を連想させる2人だ。

給仕が2人の飲み物を持ってくるとギンが口を開いた。

「さつきも言つたが俺は各地を転々としてる遊戯団の団長なんだ。ラセも各地を旅する流れのハンターだから自然と一緒に行動してるんだ」

「お前が勝手に着いてきているだけだろう……厄介事に巻き込んでな」

「厄介事ツスか？」

ライアが小首をかしげるとラセが機嫌悪そうに口を開く。

「コイツがダイミョウザザミの群れにいらんちよっかいをかけた」

「いや…だってよ、そこらじゅうにヤド真珠やら黒真珠が転がってんだぜ？採らぬわけにはいかないだろ」

「……そのおかげでこの近くの森で待ち伏せをくらってるだろ」

「なるほど……それで私達にダイミヨウザザミの狩猟を手伝えと？」

「全部倒すってわけじゃねえんだ。とりあえずダイミヨウザザミの群れを撃退する」

「ダイミヨウザザミを放っておいたら、村に被害がでる可能性も有りますわね」

「それに、困ってる人を見過ごせないツス」

2人は微笑み参加の意図を見せる、するとギンの顔が輝いた。

「ありがと 報酬はきちんと出すから…よろしく頼むよ」

「じゃーあ、ギルドを通して貰えるかしらぁん」

「のわっ！…！」

「……！…！」

「「きゃあっ」

いきなりギンとラセの間に割り込んできた顔に4人は驚きの声をあげた。

ライアとユキノは驚き、反射で抱き合って顔の主であるコメットを見上げ。

ギンはいきなり至近距離に現れたゴツいオカマに腰を抜かしてしまった。

ラセに至ってはモンスターと勘違いしたのか自分は得物を構えていた。

「何よお、みんな人を化け物みたいにい」

「コ、コメットさん……い、いつから聞いてたツスカ」

よほど驚いたのか、ユキノにぎゅっとしがみついたまま震えるライアが口を開いた。

「こんな美少年2人を私が見逃すはず〜ないでしょ〜」

そう言っつてギンとラセの2人にウィンクをするコメット。寒気に近いものを感じたのか2人は肩を振るわせる。

「とりあえずう、その依頼の内容はギルドに伝えとくわ〜」

言いながらヒラヒラ手を振りカウンターの奥へ消えていくコメット。

「なんだっ たんだ？あの化け物」

「コメットさんですわ、気をつけないと襲われますわよ」

「……あれは人間なのか？」

第14狩：太陽と月 陰と陽 朝と夜（後書き）

神月ラセさん投稿キャラの神月ラセ

風の双剣使いさん投稿キャラのギン・シルバスター

作者補正がかかっています……お二方すみません

第15狩・タイミヨウザザミ(前書き)

うーん、流石に4人の戦闘は難しいな……練習しないと

第15狩：ダイミヨウザザミ

甲殻種

柔らかな肉を、並の攻撃では傷ひとつつかない非常にその名の通り堅固な甲殻で包んだ種族だ。

確認されている甲殻種の特徴として唯一甲殻の脆い背中に頭骨を背負いヤドとしている事がある。

稀に巨大な貝殻や、堅い地盤、サボテン等をヤドにする甲殻種もいるらしいが殆どが頭骨をヤドとしているのだ。

ダイミヨウザザミも頭骨をヤドとする甲殻種である。

そのヤドは骸になってさえ、未だ失われぬ威厳を放つ一角竜モノブ羅斯の物。

単身で挑むことが条件であり、強く、固く、早いモノブ羅斯を討てるハンターはごく稀だ。

そのモノブ羅斯の頭骨をダイミヨウザザミがどう手に入れたのかは分からないが、ダイミヨウザザミはそのヤドを己の武器として使いこなす技量を持っていた。

「とりあえず何体の討伐を目指しますの?」

ダイミヨウザザミの群れが潜伏しているらしい森につくと、準備を整えながらユキノが呟いた。

「どうだろ? まあ…群れの半数倒したら群れのリーダーも危機を感じて逃げてくんじゃね?」

テントを組み立てる手を止めへラへラ笑う、ギンにユキノはため息をついた。

「お気楽ですわね……ライアはダイミヨウザザミの狩猟経験が有りませんのよ?」

「……僕がライアのフォローをする」

ギンと同じくテントを組み立てていたラセが作業の手を止めずに言った。

「珍しいじゃんか、ラセが他のやつフォローにまわるだなんてさ。もしかして……ライアちゃんに惚れちゃった?」

「馬鹿を言うな。お前達の技量では他人を庇いながら満足に動けないだろう」

「言いますわね……貴方に任せますけど、しっかりライアを守ってくださいまし」

ユキノの言葉にラセは無言だが深く頷いた。

「遅れましたッス」

丁度テントが組み立て終えた頃にライアがやってきた。

師のグリフィアに今回の依頼を受けても良いかの確認ために村に残っていたのだ。

「御師匠様いなかっただスけどミアさんに伝言頼んだツス」

「いいんですの？そんなんで」

「人助けツス。人助けなら御師匠様も認めてくれる筈ツスから」

とスパイクハンマーを構え、ちゃんと針の飛び出るギミックが作動するか確認してから、また背負いなおす。

「じゃあ、行くツス」

やれやれとばかりに他のメンバーもライアの後続いた。

グリフィアは村外れの一本の巨木に背を預け、数枚の書類を眺めていた。

「お望みの情報はあつたかい？」

「ああ、すまないな。そちらも忙しいだろうに、短時間でこの様に事を調べさせてしまって」

グリフィアと同じように巨木の反対側に背を預けている男が口を開き、グリフィアは書類から目を離さずに言った。

「まあ、いきなり君からの伝書鳩が来たのは驚いたけどね」

「本当はお前の元に自ら赴きたかったのだが……事は急を要するみ

たいでな。迷惑をかけた」

「構わないよ、君が僕を頼るなんて珍しい事だしね。古龍観察所の情報網を駆使すればどんな情報も、瞬く間に集まるし」

「あまり無茶をして、部下に逃げられるなよ、古龍観察所局長さん」
グリフィアは書類をたたむと、巨木から背中を離し、男の方に向き直る。

「といっても男はまだ背を巨木に預けたままなので、グリフィアからはほとんど見えないが。」

「ともかく助かった……感謝する」

「貸しを1つ返しただけさ」

一度深く頭を下げると、グリフィアは来た道を引き返して、村へと帰っていった。

「そろそろ、自分を許してあげなよ。グ……グリフィア」

男は悲しげに呟くと、迎えの気球を呼んだ。

ライアは草むらの影に隠れ、注意深く1体のダイミョウザザミと仲間との戦闘を観察していた。

今のライアの役目は隙を見せたダイミョウザザミに一撃を浴びせ、

離脱する事。

そうすればダイミヨウザザミは予想外からの攻撃に混乱し、戦う3人の攻撃チャンスが増える。

さらには、ダイミヨウザザミの狩猟経験の無いライアに立ち回りや、ダイミヨウザザミの攻撃方法を分からせる役割もある。ついでにこの戦法を考えたのはラセだ。

師匠にしろ、ラセにしろ、よくまあこの様な戦法を思いつくと感心するライア。

「……やっぱ3人供強いツス」

自分にだけ聞こえるような小さな呟き。

ダイミヨウザザミの動きを観察するという事はつまり仲間の戦いも観察する事にもなる。

ユキノの戦いはライアも何度か見ているが、ライアと同じような身体つきでよくあんな大きな狩猟笛を軽々しく操れると感心する。アツカーに転じている為か、得意の唄を絡めた演奏はしていないが、それでもダイミヨウザザミに重い一撃を浴びせているのが分かる。

ギンの戦いはまるで舞いを見ているかの様に美しく、華やかだ。

ギンの得物は黒狼鳥イヤンガルガの素材を使った双剣 テッセン。

美しい紫の色合いに金の刺繍が入った扇状の双剣なのだが下位クラスではトップクラスの安定した切れ味を持つ双剣だ。

ギンはそれを身体の一部の様に使いこなし、舞う。

攻撃も回避もまるで舞いの一部かの様に舞い、ダイミヨウザザミの身体に傷をつけていく。

ギンと同じく双剣を得物とするラセの戦いは荒々しくも精密だ。得物は轟竜ティガレックスの素材を使ったレックスライサー。ティガレックスの腕を模したかの様な豪快な双刃はラセが振るう事に、ダイミヨウザザミの甲殻ごと中の肉を抉りとっていく。ダイミヨウザザミの攻撃も一切の無駄がない回避で難なくさげ、そのまま攻撃に移していくラセ。

ライアが知らぬ世界にはスゴい狩人がいるものだど憧れ、立ち上がる。

3人に翻弄され、此方に背を向けたダイミヨウザザミに力を貯めながら肉薄する。

ライアが溜めれる最大の力が溜まるとスパイクハンマーのギミックが発動し、鎚から無数の針が飛び出した。

そしてそのまま無防備なヤドに向けて爆発した力が叩きつけられた。ユキノ達によるダメージの蓄積と、予想外のライアの一撃にダイミヨウザザミは体液の混じった泡を漏らすと、ゆっくりと地に伏せ。動くことは無くなった。

「これで2体目だなー、はあーあつ流石に疲れたぜ」

「あともう少しなんですから泣き言は言わないでくださいませし」

「……？」

ギン達は得物に付いたダイミヨウザザミの血肉を振るい落とすと武

器をしまつ。

「どうしたツスカ？」

その中で次のダイミヨウザザミの場所を知ろうと千里眼の薬を飲んだラセが不思議そうな顔をしたのを見たライアはそう声をかけた。

「居ないんだ……さっきまでは隣のエリアにいたダイミヨウザザミの群れが一匹も……」

ラセの言葉に3人は不思議そうに顔を見合わせ、隣のエリアに通じる道を眺めていた。

「ガアアアアアアアア」

ライア達の隣のエリアには“奴”がいた。

無惨に破壊され解体された何頭ものダイミヨウザザミの屍に囲まれながら狂気に満ちた咆哮を上げていた。

第15狩・ダイミヨウザザミ(後書き)

ごめんよダイミヨウザザミ)、・・・、(

もつ君の出番は終わりだよ(苦笑)

第16狩：黒き巨人（前書き）

ついに来ました黒き巨人。

圧倒的な破壊力の具現にライア達はどう挑むのか？

両断されるのが容易に想像できる状況の最中、駆ける赤い疾風があった。

ラセだ。

「ぐっ……」

ライアを飛びかかるようにして抱き上げ、巨剣の一撃を何とか避ける事には成功したが、そのすさまじい剣圧によりなんとラセの防具が一部砕け散った。

「目を瞑ってくださいまし!!」

ユキノの言葉にワントンポ遅れ、白光が瞬いた。

言葉の意味を理解し直ぐに目を瞑る3人。

しかし言語を理解できないのか、それとも単に間に合わなかっただけなのか黒き巨人は目を焼かれた。

「……あの、ありがとうッス」

「気にするな、ただ毎回助けられるとは限らない……自分でも気をつける」

「分かったッス」

会話を終了したライアとラセは視界が潰えたせいで無茶苦茶に暴れまわる巨人に注意しながら離れていたユキノとギンと合流した。

2人供直ぐにでも動けるように武器を構えている。

「殺気の主はアイツで間違いないな」

「人間……ですわよね？」

いつになく真剣な表情のギンが呟き。

ユキノが巨人の殺気にあてられたのか苦しげに呻く。

ユキノが投げた閃光玉により、巨人が此方に攻撃する心配が殆ど無いため、黒き巨人の全貌を確認できた。

その巨体を包むのは身体にフィットした全身鎧。

決して華美ではなく、しかし武骨に堕ちたわけでもなく、それは機能美と豪華さをギリギリのバランスで両立させた、猛々しくも流麗な完璧な鎧だった。

幾多の殺戮をこなす内に刻まれてきた獲物による抵抗の傷跡すら、威厳と殺意をより一層引き立てる戦化粧へと変わる。

一本の長い飾り毛のついた兜に入ったスリットから覗いている、紅く爛々と輝く眼は確りと4人を見つめていた。

そう、見つめていた。

「しまった!!」

いち早くそれに気づいたギンは苦悶の声を漏らしながら両隣のユキノとライアの首ねっこを掴むとしなやかな筋肉全体を使い後ろへ投げ飛ばし、そのまま無理矢理身体をラセの方へ向けタックルでラセを吹き飛ばした。

次の瞬間、もう既に視力の回復していた黒き巨人が目の前にいた。

「ガアアアア！！」

「ぬああああっ！！」

横に薙がれた巨剣　覇剣クーネエムカム　はギンを人形のように砕き飛ばした。

「ぐうう……直撃しないでこれか……」

覇剣がギンを砕き斬る直前に、ギンの優れた身体能力で身体を反らし直撃は免れたが、腹部分の鎧をゴツソリ持っていていかれてしまった。そればかりか露になった腹筋も僅かだが抉りとられていた。

「ラセ……お嬢ちゃん達を頼む」

ギンが片足を上げる独特の構えをとり、黒き巨人を睨みながら巨人とギンを交互に見やるラセに言った。

「ギンさん！？何を言ってるツスか？」

「コイツは数で敵う相手……いや、俺達が敵う相手じゃねえよ。俺が時間を稼いでるからお前らは救援を呼んでくれ」

「だからと言って、1人で戦うなんて無謀すぎますわ！！」

「……ギンならやれる」

ユキノの言葉を返したのはラセだった。
ラセはギンから目を離さず続けた。

「ずっと一緒に行動してきた僕には分かる……ギンは強い。だから俺はギンに答えるために自分にできる最善を尽くす!!」

ラセの言葉にユキノとライアは啞然となった。

普段無口なラセがこんなにも饒舌になっているのだ。
それほどラセがギンを信頼しているという事だ。

「御師匠様とラクスさんならコイツをなんとか出来るかもしれない
ッス」

「なら急いで村に向かいますわよ」

2人は少しでもギンの負担を減らすために、急いで村へと向かう。

「あれ？ラセ…いかなえの？」

「最善を尽くすとは言ったが……お前の言う通りにするとは言っていないが？」

そう言いながらレックスライサーを構えるラセにギンはほくそ笑む。

「本気でいくぞ、ギン!!」

「俺はいつでも本気さ、ラセ!!」

二人が地を蹴り、二種の双刃が巨人の振り下ろした覇剣と重なった

第16狩：黒き巨人（後書き）

次回はギンとラセ対黒き巨人です

第17狩：激突（前書き）

うーむ……巨人が強すぎるな……流石チート性能+2だ。

第17狩：激突

ゴウツ。

覇剣が唸りを上げてギンとラセの中間点に向けて振り下ろされる。

2人は左右に跳ぶことで、直撃を免れるが剣圧が2人の鎧を削った。

「一振りごとの剣圧が厄介だな……」

「なら簡単だぜ、振らせなきゃ良い話だからな。って事であれやんぞー!!」

言いが早いかギンが双刃を手にして巨人に肉薄した。

「まったく……お前という奴は」

ラセも遅れてギンの後を追う。

「ガアアアア!!」

覇剣はその巨大さ故に、密着した標的に攻撃を加えるのは難しい。

ギンはそれを理解しているのか、一気に巨人との距離を詰め巨人と密着した。

「いくぜ、木偶の坊!!」

テッセンを巨人の身体に走らせ、滑らせ、舞う。

鎧と双刃が激突し、火花が散る。

ギンは振りかかる火花すら気にせずただただ舞う。

火花が散り桜にすらみえる全てを魅せる舞い。

「ガアアアアアア！！！」

自分に密着し、ちょこまかと動く獲物に覇剣は振りだと感じた巨人は覇剣を手放すとそのままギンを砕き潰すべくその狂暴な腕を向ける。

しかし吹いた赤い風により、それは拒まれた。

跳躍し、ギンに向けられていた腕にレックスライサーを叩きつけると、そのまま巨人の肩を蹴り宙に舞い上がる。

「ハアアアアアツ！！」

火竜が上空から獲物を仕留めるが如く、落下の勢いを乗せて巨人に双刃を突き立てる。

轟竜を現したかのような豪快な見た目の刃は僅かに巨人に突き刺さり、鎧の欠片を飛ばした。

再び巨人の身体を蹴り、跳躍。

次の狙いは背中、跳躍の最中に体を捻らせ方向転換。

そのまま背中に刃を突き立て、背中を裂いた。

そしてまた、ラセも舞った。

火竜を連想させる猛々しく、雄々しい舞い。

「「鬼人化」」

2人の声が重なり、巨人を挟んだ前後で真上に二種の双剣が重なり、

2人を赤い気が包む。

鬼人化。

それは双剣使いの奥義。

身体に流れる闘気を操り、全身に纏う事により身体のリミッターを解除する事により鬼人の如く身体能力を強化する秘技。

2人は巨人の前後で高速の連斬を放つ。

その力強さは鬼人の如し。

その速さは鬼人の如し。

先程とは比べ物にならないくらいの剣速と剣圧に挟まれて流石の巨人も身動きがとれないようだ。
それを見たラセはギンに向け口を開く。

「……一気にたたみかけるぞ」

だが人は鬼人にはなる事は出来ない。
鬼人化は、正に鬼人の如き身体能力を手にする事は出来るがスタミナの消費が激しいデメリットがある。

故に双剣使いは短期決戦を望み、その為の必殺の剣技をあみだした。

「はああああああああつ！！」

2人の剣が身体を包む赤い気と同じ色の気が包まれる。

その影響か2人の剣技は更に可憐に猛々しく吹き荒れていく。

巨人の堅固な鎧に弾かれる事なく、虚空に剣を走らせたかのように
なんの障害もなく巨人を裂いていく。

鬼人化で上昇した身体能力と、培ってきた剣の技量を組み合わせた

鬼人化と並ぶ双剣使いの奥義。

乱舞。

「乱れることなく、咲き誇れ……」

乱舞による刃の断罪は黒き巨人を沈黙させ、倒れさせた。

「あり？やったのか？」

「そいつか起き上がらない限りはな……」

スタミナ切れにより鬼人化は強制的に解除され、荒い息をつく2人だが、倒れ沈黙した巨人を注意深く警戒し続けた。

それが2人の命を救った。

ルビーの様な紅眼が輝いたかと思うと、いきなり起き上がった巨人は再び2人に襲いかかった。

巨人を警戒していたため、攻撃を避けれた2人だが2人の直線上にあった巨木を一撃にして粉碎した巨人を見てゾツとする。

巨人は2人の全力を持った猛攻をもとめていないのだ。

流石に無傷とはいかなかったのか、鎧に2人がつけた剣痕から赤黒い血が流れているのは分かる。

しかし、それだけだった……。

「確かに……それだけでは倒れてはくれないよな」

「だが：ダメージをくらっているのは事実……」

歯を食いしばりながら、得物を握りしめ巨人を睨み続ける。

巨人はゆっくり振り返ると不気味な紅眼を2人に向けた。

今まで殺してきた獲物と比べると遥かに小さな目の前の獲物。

しかしその小さな獲物達は巧妙なタイミングで自分を攻め、身動きを封じ、そればかりか自分を地に伏せさせた。

腹が立つ……。

当の昔に殺戮を繰り返す破壊の具現になった黒き巨人に久しぶりに戻った感情は怒りだった。

怒りと共に彼が“ヒト”だった頃の記憶も僅かばかり甦る。

は強いね。

靄がかかったように、この言葉をいった人物は思い出せない。

だがその人物は自分が一番愛していた人物ということだけは狂化した彼でも覚えていた。

自分は負けてはならないのだ、負けてしまえばこの人物の期待を裏切ってしまう。

マケレナイ……ヤラレルワケニハイカナイ

第17狩：激突（後書き）

けしてギンとラセは弱いわけではありません、巨人がチートなだけです。

激昂したライザン以上の攻撃力とG級や剛種グラビモスを凌駕するの防御力を持った怒ったモンスターディアやナルガ並の速さで攻撃してくるのを想像してください（苦笑）

我ながら解りにくい例えだな

第18狩：決着？（前書き）

久しぶりです。

修学旅行という面倒な行事があったために全然此方に来れませんでした。

つか主人公のグリフィアようやく登場だ。

第18狩：決着？

あの男は自分とよく似ている。

グリフィアは読み終えた書類を机の上に放ると、煙草をくわえると立ち上がり窓へと向かった。

窓から僅かに身を乗り出すと加えていた煙草に火をつける。
ライアと出会ってから出来るだけ控えていた煙草。
久しぶりの感覚に身体が喜んでるのが分かる。

本当に、あの男は自分とよく似ている

紫煙を吐き出しながら、最近“黒き巨人”という名で世間を騒がしている男と自分を重ねる。

全てが同じではないが、過去に“囚われた”か過去から“逃げた”
違いでしかない。

だからこそ、巨人を助けたいと思った。
再び紫煙を吐くと、外に背を向け窓枠に腰かける。

グリフィアももし、過去から逃げていたら同じ様に狂っていただろうか？

そんな事を考えながら、立て掛けてある巨銃に目を向けた。

見た目はグランⅡダオラと酷似しているが銃身が大きく切り詰めてあり、それが古龍武器独特の神々しさと武器になってもなお失われぬ威圧感と合わりなんとミスマッチな印象をうける。

その銘をコルムⅡダオラ・カスタム。
ダオラ系列の巨銃の中で最高峰の制度をもつコルムⅡダオラをベ
スに様々な改良を施したカスタム銃。

グリフィアの銃であり、グリフィアの銃ではない巨銃。
そして巨人に対抗する為の最終兵器。

巨人の姿が確認されしだい、連絡するようにコメントに頼んである。
連絡が来しだい、コルムⅡダオラ・カスタムにより、巨人を救う。

ふとグリフィアが窓の外に視線を戻すと、ライアとユキノが血相を
変えて駆けてくるのが見えた。

「…………ぐぬう」

「ハアツ…ハアツ…」

戦況は最悪だった。

「グルウアアアアアアアアアアアア」

黒炎纏いし破壊の塊が2人に向かい、飛び込んでくる。

2人は素早く反応し、その場を離れる。

爆発が起こったかのような音が轟き、地面が大きく碎け散る。

唸り声を上げながら、地面を碎き割った巨人が黒炎を燃やしなが

ゆっくり立ち上がる。

「また破壊力上がりやがったな……ハアハア」

「……あの黒炎…鬼人化の闘気のような物みたいだな。さしずめ破神化ってどこか……」

「洒落になんねえよ、それ……」

ラセが露になっている口許についた吐血の痕を拭った。

ギンのクックDヘルムとは違い、頭全体を覆う形のレウスヘルムを被るラセはレウスヘルムを既に脱ぎ去っていた。

クックDヘルムと比べると総合防御力は高いがその分視界が狭まる。巨人の動きをより早く判断するには防御力を犠牲にしても視界を広げる必要があった。

「しかし……本当に厄介な奴だな、おい。生物離れした身体能力にさらに鬼人化もどきなんてよ、実はどっかの王国が造った生物兵器ってオチはないよな？」

「さあな…気になるなら本人に聞いてみたらどうだ？」

「ガアアアアアア!!」

「最も……話を聞いてくれるような状況には見えないが」

巨人は2人を睨むと、近くの岩を掴んだ。

「マジでか？」

「……コイツは」

巨人が唸りながら力を込めていくと、巨人より数倍は大きな岩がゆっくり持ち上がっていく。

「ゲルウアアア！！！」

頭の上まで岩を持ち上げた巨人は、そのままそれを放り投げた。うねりをあげて2人に迫る大岩。

2人は僅かな間、視線を合わせると頷きあい、ほとんど同じタイミングで双刃を重ね合わせた。

金属同士が擦り合わさる事で起きる、鈴の音にも似た凜とした音色。

それが身体のリミッターを解除し、再び双剣使いの奥義を発動させる。

「「鬼人化！！！」」

鬼の如し力の具現が2人を再び包み込むと、2人は跳躍する。岩から逃げるのではなく、岩に向かってだ。

リミッターの外れた脚力は2人を空を割きながら岩へと迫らせた。勢いが収まる前にラセは縦に、ギンは横へと刃を走らせる。

勢いが乗り、更には鬼人の力を得た2人の剣技は、まるで紙を切ったかのように容易く岩を両断した。

両断した岩の間をすり抜け際に、岩の破片を蹴り更に加速。目指すは黒き巨人。

巨人からしたら、岩が切り裂かれたかと思うといきなり猛スピードでラセとギンが迫ってくるように見えただろう。

黒き巨人は啞然として此方を見つめている。2人は双刃にありつたけの闘気を込めた。

「これで……」

「終いだぜ」

黒き巨人を舐めとる赤と青の閃光。

双閃は刃を振り切った常態で着地すると、それと同時に黒き巨人から鮮血が迸り、そのまま鮮血を迸しながら倒れた。

「……今度こそ倒したな……」

「……ハアハア、もう無理！！動けん、ラセおんぶしろ」

ギンは巨人が倒れたのを見るとスタミナ切れからか、仰向けに寝転がりながら荒い息をはいた。

「調子に乗るな、馬鹿」

かくいうラセもギンと同じく鬼人化を多用した為にスタミナ切れだ。

今日は武器を握るのも難しいだろう。

そんな事を考えながらラセは黒き巨人の亡骸を見つめる。

歴戦を乗り越えてきた証である刀傷のある漆黒の鎧。

2人の乱舞を喰らってもかすり傷しか負わせれなかったこの鎧。ラセが知る限り最強の鎧だ……自分もこの鎧を纏えば、この巨人の様な圧倒的な力を手に入れられるだろう。

かの強大なモンスターさえもが尻尾を巻いて逃げ出す、圧倒的な力が……。

「……い……せ」

そうしたら、人々は自分を敬い、恐る。

怖がる無抵抗な人間を殺めるのもまた一興だ。

「おい！！ラセ！！」

まだ成長途中の子供の血肉はさぞ温かいだろう……う。

ギンの言葉で我に帰った。

ハッと顔をあげると心配そうに此方を覗きこむギンの姿。

「ラセ？大丈夫か？」

小首を傾げ、此方を気にするギンに大丈夫だと告げるとラセは激しく鼓動を刻む胸に手をやった。

自分は何を考えていた？

思い出すのも恐ろしい。

あの鎧を見つめていたら、自分が自分で無いような気分になった。

「大丈夫か？ラセ」

自分を心配して肩に手をやってくれるギン。

多分、ギンは自分が震えているのを知っているだろう。

情けないとは思っ、しかしあの鎧は恐ろしすぎる。

戦っていた時には気にならなかったが、今こつやっつて直視すると心の弱い所を突かれて、鎧に乗っ取られそうになる。

震えが収まったらギンにも鎧を直視しないように伝えなければと考えるラセとそのラセを落ち着かせているギンの後ろに巨影が差しているのには2人が気づくことはなかった。

第18狩：決着？（後書き）

ってもグリフィアはほとんど出てない今話（笑）

だってさ……ラセとギンのコンビ書いてて楽しんだもん。

第19狩：不死身（前書き）

お久しぶりです、ばあさあかあです。

何故更新が無かった！！とお怒りの読者様は活動報告にてばあさあかあの言い訳が綴られております故にそこに怒りの文句を書いちゃってください。

第19狩：不死身

「ぐうう……なんでこんな時に限って……」

「邪魔ですわよ、貴方達!!」

ライアとユキノは森林入口近くにて遭遇したブルファンゴの群れの相手をしていた。

フゴオオオオ!!

ハンターの武器の中で最重量武器に入るハンマーに殴られても、ハンマーに重さでは劣るがその分素早い打撃ができる狩猟笛に薙がれてもブルファンゴ達は怯まずに突進を繰り返す。

「早く、御二人に加勢しなくてはいけませんのに」

まったく怯まぬ様子のブルファンゴに齒噛みするユキノ。

グリフィアに救援を頼んだ2人はグリフィアにラクスを呼んできてもらう様に頼むグリフィアの返事も待たずにいち早く森へと引き返した。

少しでも早く戻ってギンとラセに加勢したいのだ。

しかし、そんな時に少し奇妙なブルファンゴの群れに遭遇したのだ。鼻を鳴らしながらその牙でライアを押し潰そうと走り出した肉の弾丸。

ライアは横に転がる事で其れを避けると、近くで急停止したブルフ

アングの脳天めがけてスパイクハンマーを振り下ろす。

スパイクハンマーに内蔵された鉄針がブルファンゴの頭部に突き刺さった。

しかしブルファンゴは牙を振り回し、頭に刺さったスパイクハンマーごとライアを吹き飛ばす。

「致命傷は与えてる筈ッスよ!？」

普通ならば致命傷になる攻撃を喰らっても尚肉の弾丸と化してライアを撃ち抜こうとするブルファンゴ。

「なんで死なないんですの!？」

得意の演奏を奏でようにも絶えず飛び交う肉の弾丸により満足に演奏すらできない。

単なる打撃武器とかしたウォーコンガを振り回しながらユキノは叫ぶ。

ライアも確実にダメージが与えられる急所を狙ってスパイクハンマーを振り下ろすのだが一向にブルファンゴ達の勢いは衰えなかった。

「ひっ」

ブルファンゴの脳天に一撃をいれたユキノが悲鳴を漏らした。

同じようなタイミングでライアからも悲鳴が漏れた。

脳天を殴打され衝撃で眼球が飛び出た個体、スパイクハンマーによ

る一撃で胴の一部を抉りとられた個体など、通常ならばとうに息絶えていたり戦闘不能な状態になっているはずの傷を負ったブルファンゴ達がふらつきながらも2人に迫ってくるのだ。

「な、なんなんスか：あんたら」

幽鬼のようなブルファンゴ達の前にライアが震えた声で言う。

ブルファンゴ達に人語が理解できるとは思えないがその声に反応し迫ってくるスピードが早まる。

ライアはスパイクハンマーを構えてはいるものの力が入っていないのは一目瞭然だった。

「ライア、しっかりなさい！！」

戦闘意欲を無くしかけたライアにユキノが叫ぶ。

「こいつらはただ往生際が悪いだけですわ！！ダメージはちゃんと通っています、証拠に動きが衰えてきてますわ！！」

ユキノの言葉にスパイクハンマーを握るライアの手に再び力が籠る。

「御2人を助けに行くのでしょうか？」

ギンとラセの事が頭に浮かぶ。

そうだ、あの2人はこうしている今も巨人を押さえてくれているのだ。

こんな所で止まっている訳にはいかないのだ。

「ありがとツス、お陰で目が覚めたツスよ」

「じゃあ、やりますわよ!!!」

再び己の得物を構える2人の狩人。

それにゆっくりと迫る無数のブルファンゴ達。

その戦いに決着がつくのはさほど時間はかからなかった。

狩った者の礼儀として手早く剥ぎ取りを済ませた2人は再び走り出す。

「後少して2人と別れた所ですわ」

走りながらユキノがライアに声を掛ける。

ライアは頷きながら考えてみる。

先のブルファンゴとの戦いで多少消耗しているが2人はほぼ無傷だ、ギンとラセと協力すればあの巨人だって……。

いや、もしかしたらギンとラセはもう巨人を倒しているかもしれない。

そしてライアとユキノを待っているのではないか？

ギンはまた調子にのって自分と巨人との戦いを有ること無いことライアに聞かせるのだ。

ラセはそんなギンを見てやれやれとばかりにため息をつく。

そんな幸せな情景が容易に想像でき、ライアは思わず笑みを溢す。

第19狩：不死身（後書き）

少しずつプライベートが落ち着いてきましたので更新を再開します。

まあ、更新はまだ遅いかと思いますですが頑張っていきたいと思っています。

第20狩：決着（前書き）

長いとggdgd感が否めないなあ。

一話一話が長い先生方本当に尊敬いたします。

第20狩：決着

「…………グアアアアア」

吐息とも唸りともとれる声を漏らしながらゆっくりと確実にライアとユキノに近づく巨人。

一步一步、巨人が近づく度にライア達にかかる重圧感は重くなる。

ライアはただただ泣き崩れ最早戦闘どころではない。

自分がライアを守らなければ。

ユキノはそう自分に言い聞かせるとウォーコンガを構える。

できれば演奏で移動速度を上げたい所だが目の前の巨人がそうはさせしてくれまい。

巨人が攻撃範囲に入るとウォーコンガを振り回す、巨人の胸にぶつかったウォーコンガはユキノに岩を殴ったような感触を伝える。

手に電撃が走ったかのように痺れるがそれで動きを止める訳にはいかない。

無防備なライアに巨人の意識が向いたら終了だ。

まずは巨人の注意をライアから引き離しユキノへと向ける。

移動しながら何度も殴り続けると流石に目障りだと感じたのか巨人はユキノに向き直り咆哮をあげる。

殺気が衝撃波のようにユキノにぶつかり動きを束縛し、巨人はその

隙をついてユキノに肉薄し拳を振り下ろす。

横に飛ぶことで間一髪それを避けたユキノは先程自分がいた位置を見てゾツとする。

巨人の拳が地面に突き刺さりそれを中心に地面が大きく凹んでいるのだ。

もし直撃したら……。

想像しかけた自分を叱りつけると武器をしまい次の攻撃に備える。

もう充分ヘイトは稼げた筈だ、巨人の注意がライアに行くことは無いだろう。

後はグリフィアが来るまで時間を稼ぐだけだ。

「ガアアアアア」

「速いつ!?!」

巨人は身体を屈めると脚力を爆発させる、人体の限界を超えた速さでユキノに迫る黒き巨人。

それを危うくも交わしたユキノが体勢を立て直すとまたもや突進を仕掛けてくる巨人。

ユキノの動作が1つでも遅れたらユキノは黒き巨人に蹂躞される。

その事を頭に入れながら、巨人が駆けると即座に身体を反らしそのまま自分の脇を過ぎ去った巨人を見る。

既にその時巨人は突進の為に身体を屈めており、ユキノが向き直ると同時に駆ける。

その繰り返し。
繰り返しという事はユキノに部が悪すぎる。

ユキノの身体能力は職業柄、常人を大きく上回る。

しかしそれはあくまで人間の範囲だ。

対する巨人は人間どころか並みのモンスターをも上回る身体能力を
持っているのだ。

先にリズムが崩れるのがどちらかという事はユキノは充分理解して
いた。

一歩間違えれば巨人の攻撃を喰う状況の中張り積めたユキノの精神
力は最早限界が近い。

何か状況を緩和できる策が無いものか、と思考を凝らしながら身体
を反らして巨人の突進を避ける。

その時、ユキノは妙な浮遊感に襲われた。

何故だろうと首をかしげるユキノは直ぐに自分が吹き飛ばされてい
るのに気づいた。

「カハッ……」

理解したその瞬間、脇腹に衝撃が走り血が逆流し口から血が吐き出
される。

そのまま受け身もとる術なくユキノは地面に叩きつけられ更にまた
衝撃が身体を駆け巡った。

脳を揺さぶった衝撃が収まり、薄れゆく意識の中ユキノが目にした
のは腕を伸ばしたリアットの形で静止する巨人の姿だった。

解決策がないか思考を凝らしていたのが仇となり、巨人が腕を伸ばし最初から身体を反らしたユキノを狙っていたのを今更気づいたユキノはもう一度吐血すると恐怖のあまり声も出さず震えながら此方を見つめるライアに首を向けた。

「……………ライア…ア逃げ…」

せめてライアだけでも……………そう脳が思考したのを最後にユキノの意識は完全に停止した。

「……………ユキノさん？」

震え掠れた声がライアから漏れる。

ライアの目には果敢にも巨人に挑んだユキノとライア達を逃がすために戦ってくれたギンとラセの無惨な姿が映っていた。

「……………ライアのせい…ッス」

ポロポロとライアの大きな瞳から大粒の涙がこぼれ落ちる。

ライアがもう少し早く救援を頼んでいたらギンとラセは無事だったかもしれない。

ライアがギンとラセが倒れている姿を見て泣き崩れなければ、ユキノと共に戦えていればユキノは無事だっただろう。

「グウウルルルウ」

新たな獲物に狙いを定めて殺気を撒き散らしながら迫る巨人。

巨人に仲間を奪われ悔しい筈なのに、殺したい程に憎い筈なのに…
…ライアは恐怖に吞まれ動く事ができなかった。

弱い自分に嫌気が差した。

強靱な手で首を掴まれると、まるでライアの体重等感じていないように巨人は巨人の目線までライアを持ち上げる。

巨人が力をいれたらライアの首は小枝の様に折れてライアは死ぬだろう。

しかし巨人は一気に力を込める様な事はせず、ゆっくり少しずつ手に力を込めていく。

ライアをいたぶり、苦痛に歪む表情を楽しむかのように。

今まで出会ってきた人の顔が走馬灯の様に浮かんでは消えていく。

最後にライアの脳裏に浮かんだのは自分の師事するグリフィアだっ
だ。

「お……し……しよ……ま」

気管を圧迫され消え入りそうな程小さな声で浮かんできたグリフィアを呼ぶ。

するとライアは脳裏に浮かんだ師匠の表情が微笑みを浮かべたのが見えた。

銃声。

「グウアアア」

一発の銃声音の後、巨人はライアを放ると苦痛の声をあげる。

「ケハツケハツ……」

何が起きたのか？と気管が解放された事で肺が空気を求める中ライアは巨人の方を見た。

巨人は腕を、正確にはライアを掴んでいた腕を押さえある一点を睨んでいた。

「悪いな、ライア……遅くなった」

落ち葉を踏みしめて“彼”はライアの前に立った。

極めて鋭いバレルが装備された銃を肩に預け、油断なく巨人を睨み返す。

「……御師匠様」

「じゃあ、弔い合戦と行くか？」

血溜まりの中倒れ伏すギンとラセ、少し離れた場所で口から血を流しながら倒れているユキノを見るとヘヴィボウガンに属するコルムⅡダオラカスタムを片手で構えるとグリフィアは口を開く。
口調こそふざけたものだったが、その声色には怒りの色が見えていた。

「……勝手に殺す……な」

「ラセの言う通り……俺ら少し休憩入れてただ……けだぜ？」

「……名誉挽回ですわ」

口を開きふらつきながらもゆっくりと立ち上がる仲間にはグリフィアは微笑む。

「みんな……無事だったんスか？」

仲間の無事に涙で溢れんばかりだったライアの瞳から一筋の雫がこぼれ落ちた。

「良かった……本当に良かったッス」

仲間を失いかけた恐怖で震えだしたライアにグリフィアは優しく頭を撫でる。

「後は俺に任せろ……ライアはこいつ等を村に」

「まだ……僕らは戦える」

ラセの言葉にギンとユキノも頷きグリフィアを見つめる。

「強がるな、お前らもう立つのもキツイだろ……もういい、俺が来るまでよくやってくれた。だから今度は」

その時巨人が動いた。

巨人は自分の存在を気にすることない獲物に肉薄し拳を振り下ろそうとする。

一撃で岩を砕き、地面を割る威力を持つ拳。

いくらグリフィアとはいえ当たれば無事では済まないだろう。

「俺が頑張る番だ」

顔をラセ達に向けたまま、グリフィアは一瞬で巨銃を巨人に向けてと引金を引き続けた。

放たれた弾丸の嵐は巨人の兜に連続で直撃し、火花を散らしながらその衝撃で巨人は後ろへと下がっていく。

「分かったら早く行け」

グリフィアの決意を感じとったのかラセ達は頷きお互いに肩を貸し合いながら歩き出した。

「御師匠様……絶対勝つて下さいッス」

最後にライアが小さく呟くと3人を補助するべく駆け出した。

「さてと……いつちよやるか？黒き巨人さん……いや」

グリフィアはライアを見送ると頭部に走った衝撃で踞る巨人に向き直った。

グリフィアの声を聞くと黒き巨人はゆっくり立ち上がる。

その兜は完全に着弾点の重なった無数の弾丸のせいで着弾点から大きなヒビが入っていた。

兜としての形状を保っているのが不思議なくらいだ。

「ラクス・ブレイン」

グリフィアの声と同時に限界を超えていた兜が砕け散り、黒き巨人

ラクス・ブレイン の姿が露になった。

「……俺はアンタを裁かなきゃいけない。それが俺がアンタにしてやれる救いだ」

コルムⅡダオラ・カスタムの銃口を黒き巨人もといラクスへとグリファイアは向ける。

「ガアアアアア！！！」

素顔が露になったラクスの表情は憤怒に染まりきっていた。目は血走り、口は牙を向き、顔中に血管が浮かび上がり、最早人間の表情には到底思えなかった。

「理性を失ってる訳か……なら正気に戻すまでだ」

呟きながらガンベルトにぶら下げてあったパーツを手取る。コルムⅡダオラ・カスタムの尖った銃口を回転させるとそれはあっさりとは抜け落ち銃身の短い形状になる。尖った銃口と入れ換えにパイプの様な銃口をはめるとコルムⅡダオラ・カスタムが唸りの様な音を立てた。

「来いよ、ラクス」

「ガアアアアア！！！」

牙を煌めかせラクスは拳をグリファイアに放った。

バックステップで直撃を避けるが、拳圧だけで身体が持っていかれ

そうになる。

「くっ、ヘレナ・ブレイン……アンタの娘だよな」

“ヘレナ”という単語を聞くと怒りの表情が張り付いたラクスの顔がピクリと反応し僅かに動きが止まる。

動きが止まった瞬間、コルムⅡダオラ・カスタムが弾丸を放ち、ラクスの腹に命中する。

「グルアアアア!!」

弾丸の勢いは命中しても尚衰えずにそのままラクスを後退させる。

「ヘレナ・ブレイン、今から2年前……薬草摘みの最中モンスターに襲われ死去」

「グツガアアアア!!」

淡々とグリフィアが告げるなか、ラクスは聞くのを恐れているかの様に無茶苦茶に暴れまわる。

「そしてアンタは娘が死んだ事を認める事が出来ず、娘は何者に連れ去られたと認識した」

「グガア!!グガア!!」

聞きたくないとばかりに首を振りながらラクスは次々と拳を突き出す。

一発一発が人間等簡単に砕き割る程の威力だがグリフィアはそれを

見切り、僅かに移動する事でそれを避ける。

「そしてアンタは“黒き巨人”となりモンスターを虐殺し続け娘を探し続けた」

ラクスに向け放たれた弾丸がまたラクスを後退させる。

「そればかりが……遂にアンタは人間にも矛先を向けた」

グリフィアは起き上がり近くに刺さっていた覇剣を抜いたラクスを睨んだ。

その瞳は静かに怒りの炎が燃えていた。

「なんの関係のない人達をアンタは……殺し娘を探した。アンタがクルーエルに戻って来るまでに寄った村は全て黒き巨人に襲われ全滅していた……人っ子1人残さず」

今度は2発ラクスに向けて弾丸が牙を向く。

ラクスは覇剣を振るいそれらを叩き落とした。

「知ってるか？アンタが殺した人間やモンスターの中にはヘレナ・ブレインと同じくらい年の奴もいたんだぜ？」

グリフィアは止まらないパイプ状の銃口を取り外すと、ベルトにぶら下げてあった最後の銃口をコルム・ダオラ・カスタムへと装着した。

「アンタは……娘さんが亡くなった事を認めなきゃならない」

鋼竜。

新たなに装着された銃口はそう示すのが一番ピンときた。

鋼竜クシャルダオラを模した神々しく、破壊的なデザイン。

「……それがこの世に残された者が去っていった者に向けてできる最後の手向けだ」

グリフィアの呟きにコルムⅡダオラ・カスタムが吠えた。
クシャルダオラを模した銃口から放たれた弾丸は風に包まれながらラクスに向かう。

「ぐうおおおおお！！へレナアアアアア！！」

風に包まれながら胸に突き刺さった弾丸はラクスを文字通り吹き飛ばした。

木々を薙ぎ倒しながらラクスの巨体が吹き飛ぶ。

森を抜けた所にある崖の近くでようやくラクスは止まった。

「アンタ馬鹿だよ……狂っちゃうほど娘さんが好きだったのに……それで人殺しになっちゃったら娘さんはどうすりゃいい？自分の為に人殺しに染まった親を見て娘さんはどう思うんだ……」

口を開きながらラクスへとグリフィアは近づいていく。

大の字になって倒れているラクスはグリフィアの言葉に涙を流していた。

既に顔からは憎しみの色は消えており、黒き巨人からラクス・ブレインに変わっていた。

「私は愚か者だ……へレナの死を受け入れるのが恐かった。私は狩

人……恐いものなど無い筈でした……けど」

「娘さんを失った時始めて恐怖を感じた……か？」

「その通りです……身体だけ強くなっても私の精神は脆かった……ヘレナは私の救いを待っている……そう思えば身体も動いた……しかし私はただ……逃げてただけなんです」

ラクスはゆっくりと立ち上がりグリフィアを見た。

グリフィアもラクスの瞳を見つめ返す。

「……アンタがしなきゃならない事……もう分かるな？」

「ええ、ギルドに自首します。罪を軽くしようなどとは思いません……与えられた罪を私は受け入れます」

弱々しくグリフィアに微笑みかけるラクス。その慈愛に満ちた微笑みはただただ真っ直ぐだった。

「とりあえずはライアさん達に謝らなければなりませんね……私は理性を失っていたとはいえ彼女らを殺しかけたのですから……グリフィアさん」

ラクスは遠くを見てそう呟くとグリフィアに向き直り深々と頭を下げた。

「ありがとうございました」

その言葉にグリフィアはくすぐったそうに笑うのだった。

ラクスは通報を受けたギルドナイトに連れていかれた。意思を失っていたとはいえ、モンスター、人間両種族を大量虐殺したのだ。

その罪は決して軽くはない。

ラクスは別れ際に地面に頭が着くくらいに村人達に頭を下げた。

理由はどうであれ、クルーエルのハンターが1人減ったのだ。

村にかなり無茶をかけることになるから責任を感じているのだろう。そんなラクスを村長であるミアは微笑みで見送ったのだった。

ラセとギン、ユキノの3人はラクスが寄付した薬で徐々に回復しつつあるがまだまだ安静にしなくてはならないらしい。

移動遊戯団は団長のギンの回復待たずして出発した、これはギンの命令らしく1人の怪我で遊戯団のスケジュールをずらす訳にはいかないらしい。

怪我が完治したら後々ラセと共に遊戯団を追いかけていくらしい。

そして……。

ライアは

「御師匠様！！今日もラクスさんやユキノの分も頑張っ
て依頼をこ
なすツスよお」

「つたく……分かったよ」

今日も元気に村を駆け回り皆に笑顔を振り撒いている。

第20狩：決着（後書き）

決着にあまり納得がいつてませんので。
もしかしたら修正がはいるかも……。

キャラフィールも更新しなきゃなあ。

第21狩：食卓（前書き）

あけましておめでとうございます。

そしてお久しぶりです、ばあさあかあです。

更新が長くに渡り無かったため、こいつ止めたんだなと思った方：

…残念でした（笑）ばあさあかあはゴキブリ並みの生命力で出筆を
続けていますよ。

そして第3章がこっそりスタートです。

後書きにてお知らせ等があります故、よろしければ後書きもご覧
ください

第21狩：食卓

「ねえねえ、ファイア！！火山に炎妃龍が来てるんだって、ちょっと狩ってこない？」

夢を見ていた……。

「炎妃龍？……火山まで行くの面倒くせえ」

昔の記憶だ……。

「へえ〜、炎妃龍となら良い力比べができると思うけど？」

もう見ることはないと思っていたが……。

「！！おい、何ぼーっと突っ立ってんだ？さっさと準備しろよ」

……ラクスと関わった事で昔の記憶が刺激されたのだろうか？

「ふふっ、はい分かりました」

彼女の笑顔を見るのも久方ぶりだ……。

「何笑ってやがんだよ？」

あの頃は、ただその笑顔に見とれていた……。

「私は幸せ者だなと思ってさ」

だが……今はその笑顔が眩しすぎる。

「何でだよ？」

眩しすぎる笑顔を浮かべる彼女……名前はなんだったか？

「教えないよ」

彼女の容姿、性格その他のデータは思い出せる……。

「気になるだろうが、教える気が無いなら言つな馬鹿。言わねえならもう口聞かねえぞ」

だが……名前の部分だけがごっそりと抜け落ちている。

「……分かったわよ、言えば良いんでしょ……」

思い出そうとすると何者かがそれを阻止するかのよつに頭の中に霧がかかる……。

「えっと……その……あのね……こんなに良い人のお嫁さんになれて幸せだと思ったの……」

名がどうしても思い出せない彼女……だが彼女を自分は心から愛しているのは確かだった。

今も……昔も……。

……。

鼻が刺激臭を感知し、脳に信号を与えて、夢の世界から無理矢理叩き起こされる。

「っ……何の臭いだ？」

鼻を摘まみ臭いを嗅がないようにしながらグリフィアはベットから起き上がる。

アイテムボックスから片手で消臭玉を幾つか取り出すと臭いの元凶であるキッチンに向かう。

「あつ、おはようございますグリフィアさん」

恭しく私服のミニスカートの両端を摘まんでお辞儀するのはユキノだ。

普段も防具でいる事が多い彼女の私服姿は中々珍しい。

ついでにユキノはグリフィアの時と同じ様に無理矢理ライアが同居させた。

「あつ、御師匠様。起きちゃったツスカ？」

麻の半袖半ズボンというラフな恰好はライア。

もっと女の子らしい服を買ってやったのだがライアは着るのが勿体無いと、結局プレゼントした服を今までライアが着ることは無かった。

「これは何の臭いだ？」

鼻を摘まんでるため、若干隠った声になるが気にしてられない。臭いがキツすぎて目まで痛くなってきたのは気のせいではないだろう。

「朝ごはんツスよ？ライアは料理といっても炒める位しか出来ないツスからユキノに教わってたツス」

笑顔のままグリフィアに説明するライア。

グリフィアはユキノがゆつくりとしたペースでかき混ぜ続ける鍋を覗きこみ……思わず目をそらした。

「ユキノ少し聞いていいか？……これは何を作ってるんだ？」

「ポトフですわ、これなら簡単ですし栄養面も味も申し分ないですから」

「……何を入れたらポトフがショッキングピンクになるんだ？」

コポコポと泡ぶきながら毒々しいピンクの液体からグリフィアは目を離せなかった。

少なくとも食材の色ではない……。

「普通の野菜と肉をベースに隠し味を加えてじっくり煮込んだだけですわ？」

何か問題でも？という風に小首を傾げるユキノ。

「隠し味というのは？」

だいたい予想はつくのだがため息をつきつつグリフィアは問う。

「ライア、メモとってあるツス えっとー」

鉛筆とメモ帳を手にしたライアが楽しそうにメモした物を読み上げていく。

「ハチミツ、トウガラシ、春夜鯉、マンドラゴラ、アルビノエキスに火竜の体液、毒袋、爆薬、後最後に桃毛獣の牙と爪をペーストした粉末を加えてじっくり煮込む！！ツス」

ライアの言葉にグリフィアは呆れて物も言えなかった。

それだけのものがこのダーククマターに投入されているというのか……。

というか既に食用では無いような物まで入っているようだ。

それに隠し味というのは料理の味を深めたりするために入れるものであり、少例はあるが少量を僅かに入れるものだ。

ほとんどの場合、量を入れすぎれば料理の風味が消え、種類を入れすぎれば味にバラツキが出てくる。

というか隠し味以前に食用にならない素材が入れている時点でユキノはどうかしているんじゃないか。

とりあえずこの刺激臭を何とかしなければ鼻が参ってしまう。

グリフィアは手に持った全ての消臭玉をコポコポと煮えたえるダーククマターに向け投げた。

綺麗な放物線を描いた消臭玉はダーククマターを取り囲むかのように

着地し、そこから強力な消臭作用のある煙が吹き出すとダークマターを包み込んだ。

「ああ！？何するんですのグリフィアさん！！」

「料理するのは構わないが周りに迷惑をかけるな、この臭い多分外にも漂ってるぞ」

「臭いッスか？」

「何ですか？臭いつて？」

この2人料理に夢中でこのどんなモンスターでも尻尾を巻いて逃げ出す臭いに全然気づかなかつたらしい。

とりあえずは臭いの元凶を消したがこの空間に隠った臭いを換気しなければ。

グリフィアは窓に近づくと其を開いていく。

「おおっ！？空気が新鮮ッス！！」

「鼻が痛いと思っていましたら、そういう事でしたのね……」

比喩無しで痛い空気（主に鼻）が外の空気と入れ替わり、ようやく2人もダークマターの臭いを自覚したらしい。

「これ……どうしましょう？」

ようやく自分の造り出したのが料理でなくダークマターだと気づいたユキノは困った様に首を捻った。

臭いが消えたとはいえこの色はあまりにも毒々しい。
少なくとも食べ物として処理はできないだろう。

「……ギンにでもやっつけ、常人ならこの色を警戒して口をつけないだろうが……お前が頼めばお調子者の奴なら食つかもしれんぞ？」
まあ、冗談だがと付け足そうとしたそれは外から聞こえた大声に防がれた。

「誰か俺を呼んだかー!!」

朝からハイテンションな叫びが家に響くと、先程グリフィアが開けた窓からギンが入ってきた。

「何で窓から入ってくるツス？」

「玄関までいくのが面倒だからだぜ」

ライアが不思議そうにギンに訊ねるがギンはふざけた様子でそれに答えた。

「朝から元気ですね、彼」

「はあ………すまない」

遅れてやって来た（玄関から）ラセが額を押さえ、ため息をつきながらユキノに頭を下げた。

ギンとラセはラクスとの闘いでかなり消耗していたらしく、まだ回復の為に村に留まっている。

切傷等は既に痛まなくなっているらしいがギンは右腕、ラセは左腕

を折っていたのが効いているらしい。

「んで？誰か呼んだかい？」

改めて訊ねてくるギン。

流石にギンとラセまで一緒に住めるほどこの家は広くないため、ギンとラセは小さな空家で暮らしているのだが、こつやって日課のように遊びにくる。

「ギン、お前さんにユキノから手料理のプレゼントだとさ」

「マジ！？ユキノちゃんの手料理！！いやあ、嬉しいなあ、もう鍋ごとでも食べそうだぜ」

ギンは自分が死亡フラグを立てているのに気づかないのだろうか？ギンの言葉に伏せ目がちだったユキノの瞳が輝いてくる。

「本当ですよ！？じゃあ、どうぞ鍋ごといつちやってくださいな」

ドんつとダークマターが並々と入った鍋がギンの前に置かれた。

その毒々しいまでのピンク色に流石に笑顔がひきつるギン。

「じゃあ、残さず食べてくださいね」

ギンに笑顔の重圧をかけたユキノは機嫌良さそうに此方に戻ってくる。

その奥で椅子に腰掛け世界の終わりが来た様な表情でダークマターを見つめるギンは何ともシニールだ。

流石に本当に食べはしないだろうが、ギンがユキノの為に食べるか

自分の為に食べないか悩んでいる様子を見るのは退屈しなさそうだ。

「……ユキノまだ材料は余ってるか？」

「ええ、たくさん作るうとしてましたから」

ダークマター量産計画を阻止できたみたいだ。

「ちよつと来い、料理教えてやる」

悩み悶絶するギンを見ていたライア共々ユキノを呼ぶとグリフィアはキッチンにたった。

ラセも悶絶する相方を見るより、ためになると判断したのかライア達から一歩離れた所からキッチンのグリフィアを見つめた。

「ライア、ヘアゴムあるか？」

どうぞツスとライアがグリフィアにゴムを渡すとグリフィアはなれた手つきで髪を纏めて結い上げた。

「ポニーテールの御師匠様ツス……」

「調理の際邪魔だからな」

そう答えるとグリフィアは野菜を洗っていく。

「隠し味云々を入れるのは基本の料理が完璧になってからだ。基礎がなっていない料理に隠し味なんて洒落た事してもまず美味しくはない」

口を開きながら食材を華麗に切って行くグリフィア。その光景に感嘆を漏らすライアとユキノ、この分だと何回感嘆を漏らす事になるだろうか……。

その後も所々で説明をいれながら調理を進めていく。

「後はじっくり煮込んだら一般的なポトフの出来上がりだ」

鍋を火にかけると調理を見ていた三人に向き直る。

「スゴいッス御師匠様!!何でもできるんすね」

「昔、覚えた」

短く答えるとダークマターに顔を突っ伏して気絶していたギンを救出してやる。

泡を吐いているが口に解毒草を詰め込んでおいたから大丈夫だろう。

「それで?何か用があるんじゃないのか?」

椅子に腰掛けながら無表情のラセに問う。

何故分かった?というような表情のラセを笑いながらグリフィアは口を開く。

「ギンならまだしもお前が何の用もなく此処を訪ねては来ないだろう?」

その通りだ、と答えながらラセは一枚の紙を差し出してくる。

「ラクス・ブレインがこの村を去った事から村長が新しいハンターを雇ったらしい。それがそのハンターの履歴書だ」

「何故これが俺に？」

「多分この地形を教える、との事じゃないか？」

グリフィアは紙に目を通しながら火を止めてポトフを皿に注いでいく。

この履歴書によると上位に上がりたての下位ハンターくらいか……。これなら地形さえ覚えればすぐに戦力になるだろう。

履歴書をポケットにねじ込むと皿に注いだポトフを並べていく。

「ユキノ、ギンの口になが虫ほおりこんでやれ」

ギンをなが虫で起こすと各自を食卓につかせる。

「ラセもギンも飯食ってけ。んじゃいただきます」

「「「「いただきます」」」」

今日もまた平和な1日を迎えることができそうだ。

第21狩：食卓（後書き）

お知らせです。

まだプライベートがバタバタしているために更新は不定期になります。

そして他の作者様の小説に感想を残すことも難しくなってきました
（泣）

なので感想の返信は頑張っていたと思いますが……。

ですがプライベートが落ち着けばウザい程の感想を残していきたい
と思いますので……ご理解お願いします。

そして最後に一部の作者様にお願いのメッセージを送る場合があります
ますのでその時は驚かないでくださいね……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0487i/>

幸薄ハンターの受難

2010年10月10日19時24分発行